京都府埋蔵文化財情報

第 4 号

昭和57年度発掘調査予定の遺跡……堤　圭三郎…… 1
昭和56年度京都府下埋蔵文化財の調査……堤　圭三郎…… 5
狐谷横穴群発掘調査概要……久保田健士……15
豊富谷丘陵遺跡発掘調査概要……増田　孝彦……21
加悦町温江百合3号墳出土の埴輪棺……佐藤　晃一……27
古代エジプト遺跡を訪ねて（1）……小山　雅人……33
—昭和56年度発掘調査略報—……37

17. 前 椚 2 号 墳	23. 長岡京跡左京第83次
18. 宮 ノ 平 遺 跡	24. 長 岡 宮 跡 第119次
19. 広 隆 寺 跡	25. 亀 岡 条 里 制 跡
20. 法 成 寺 跡	26. 青 野 遺 跡
21. 長岡京跡右京第83次	27. 後 青 寺 跡
22. 長岡京跡右京第84次	28. 宮 遺 跡

府下遺跡紹介　6. 新戸1号墳……56
長岡京跡調査だより……59
センターの動向……60
受贈図書一覧……63

1982年 6 月

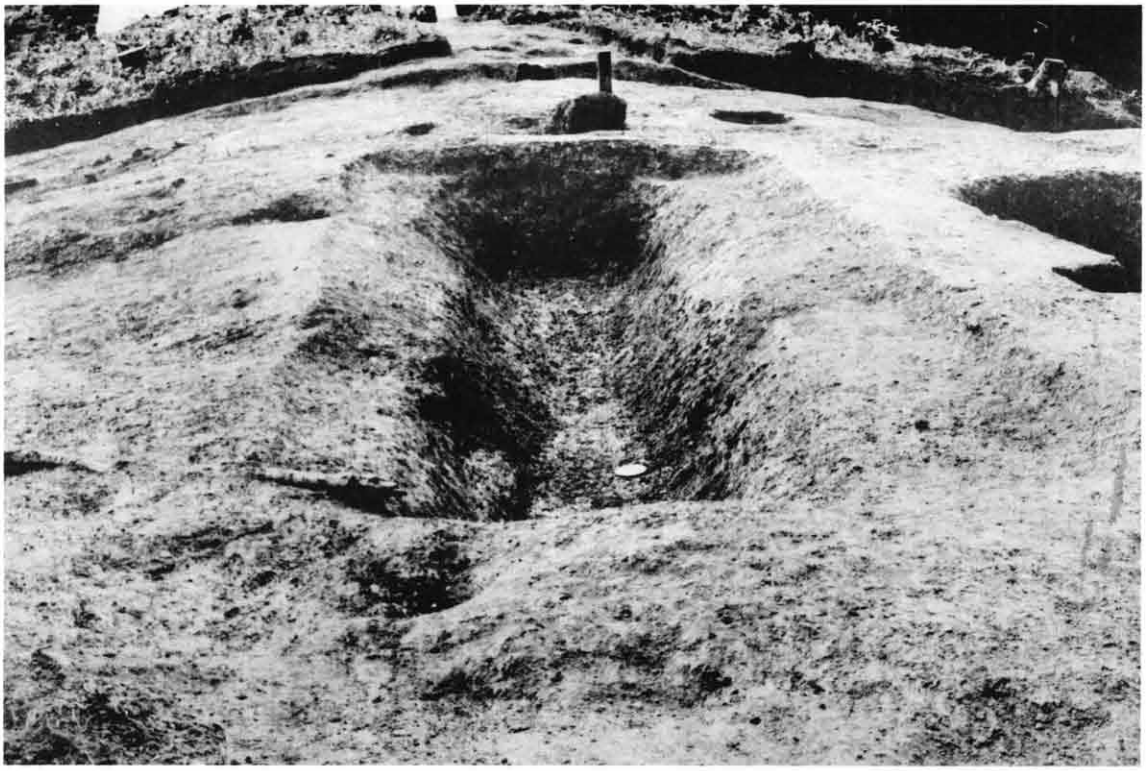
財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版1　狐谷横穴群

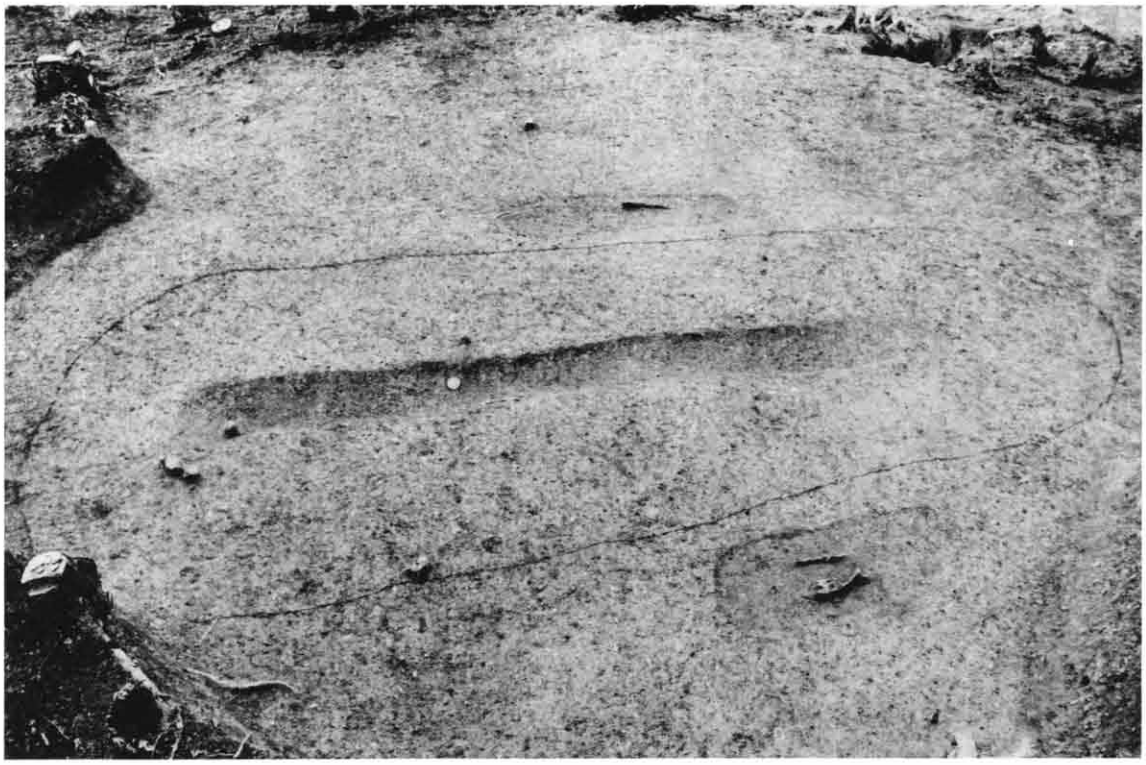
(1)　2号～7号横穴（南西から）

(2)　7号～9号横穴（南から）

図版2　豊富谷丘陵遺跡

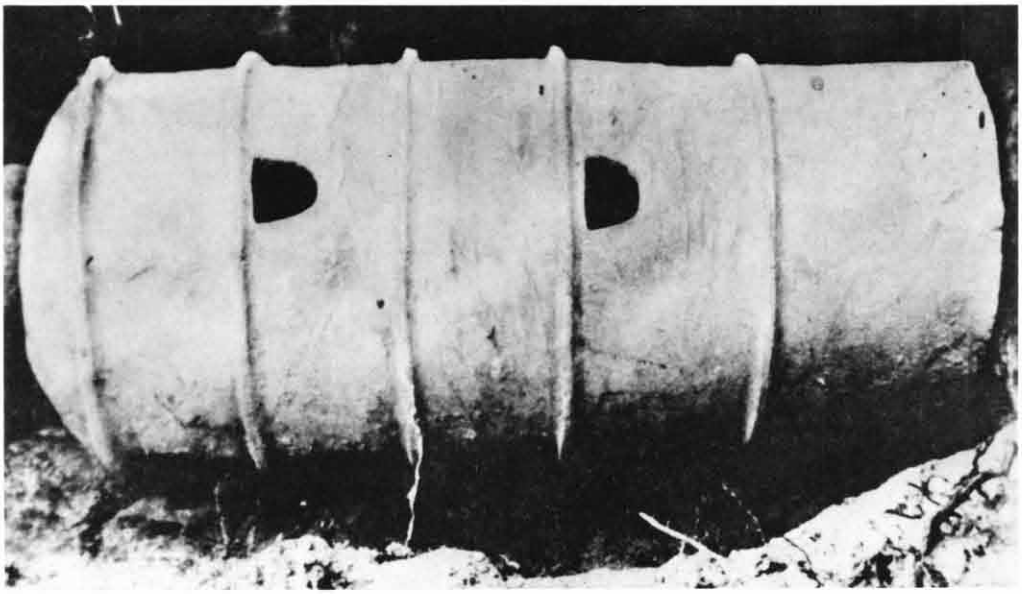


(1)　⑩狸谷17号墳鏡出土状況（東から）



(2)　②谷尾谷１号墳遺物出土状況（北から）

図版３　　加悦町温江百合３号墳出土の埴輪棺

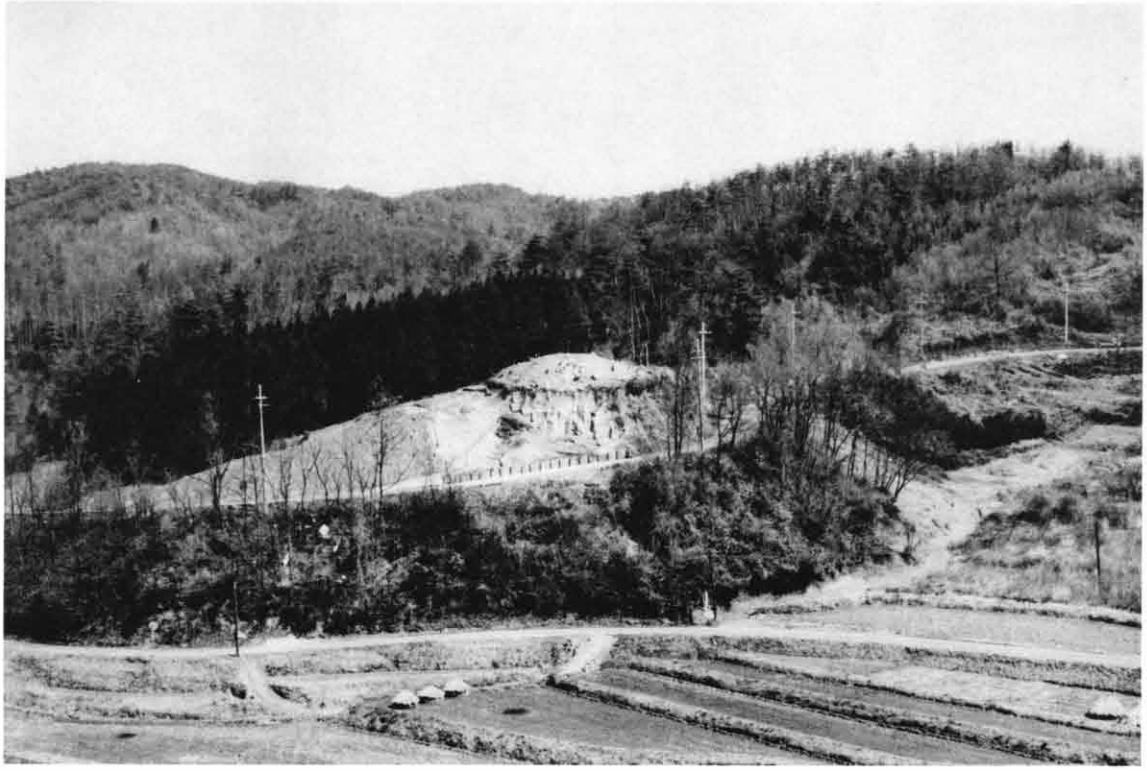


(1)　埴輪棺出土状況（昭和34年当時）

(2)　埴輪（側面）

(3)　埴輪（側面）

図版4　前 椚 2 号 墳



(1) 古墳遠景（南西から）

(2) 石室全景

図版5　宮ノ平遺跡

(1)　宮ノ平4号墳周溝検出状況（南から）

(2)　宮ノ平5号墳溝内遺物出土状況

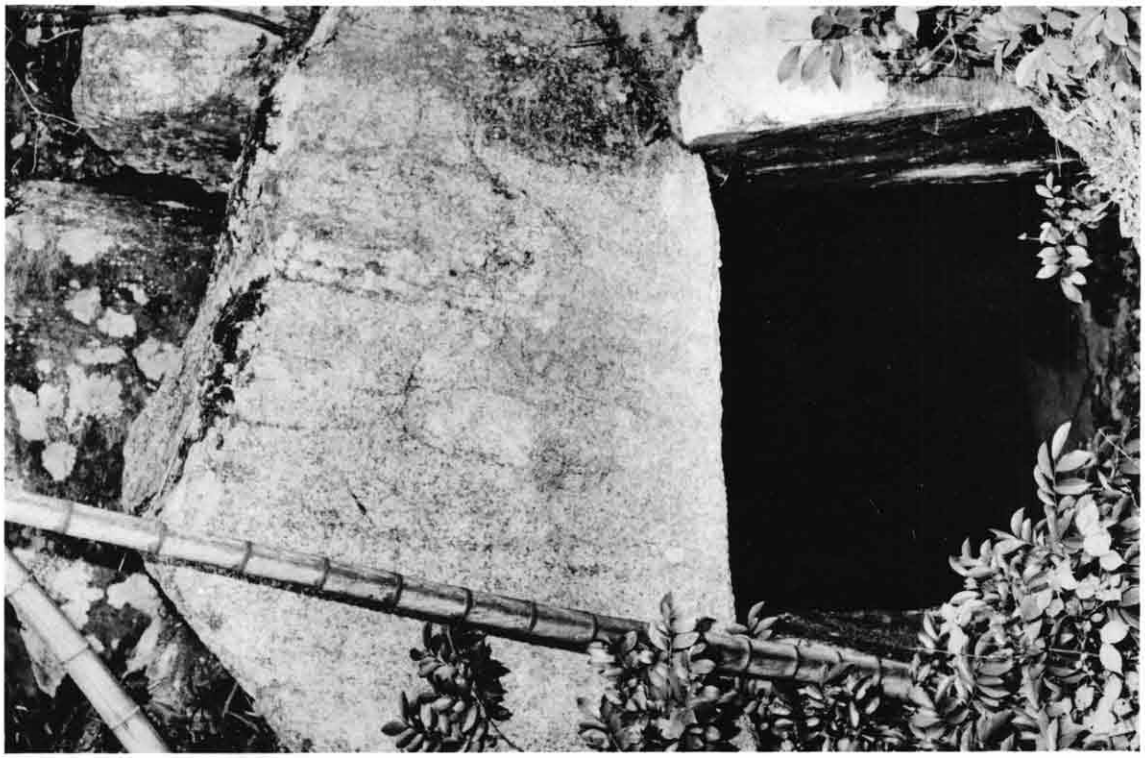
図版6　広隆寺跡

(1)　梵鐘鋳造遺構SK22（西から）

(2)　梵鐘鋳造遺構SK22（南から）

図版7　新戸1号墳

(2)　奥壁（石棚施設）



(1)　開口部

昭和57年度発掘調査予定の遺跡

堤　圭三郎

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは，発足後二年目を迎えた。当調査研究センターの直面する事業の一つは，府下の各地における埋蔵文化財の発掘調査であるが，初年度は21件の調査を受託した。調査結果の概要は別項でのべるが，調査に際しては職員一同精一杯の努力を払ってきたと信じている。調査を担当したものとして，発掘調査を実施した遺跡はすべて重要なものであり，何らかの意味で保存を必要とするものであると考えている。しかし，現実に保存するか否かは，開発関係機関と教育委員会との協議に委ねられている。当調査研究センターでは，調査の結果特に重要と認められる福知山市大内城跡，亀岡市篠・西長尾５・６号窯跡，八幡市狐谷横穴群，加茂町前椚古墳の４か所については，保存を配慮されるよう関係機関に対しセンターの意向を伝えた。

昭和57年度は，当調査研究センターが既に受託し発掘調査を実施しているもの又は何らかの協議があり近く発掘調査が予定されるものは，別表のとおり26件ある。昭和56年度には，当初予定していなかったのに急に依頼されたものもあったので，昭和57年度も現在予定している以上の件数を調査することになるものと思う。

別表に記す発掘調査26件のうち，昭和56年度からの継続で本年度は出土遺物の整理だけのものは，９豊富谷丘陵遺跡群，17広隆寺跡，24宮ノ平遺跡，25狐谷横穴群の４件，発掘調査が継続するものは，２下畑遺跡，８土師南遺跡，11青野遺跡，13亀岡条里制跡，14篠窯跡群，16法成寺跡，20長岡京跡の７件，事業は継続するが対象とする遺跡が異なるものは，５山田館跡，６洞楽寺古墳，７後青寺古墓の３件であり，残り12件は新規の事業である。

また，古殿遺跡は昭和52年の調査で古墳時代の木製品が多量に出土しており，関連遺構の検出が予想される。

後青寺古墓は，昭和56年に実施した大内城跡との関連が期待され，青野遺跡は昭和47年度に綾部市教育委員会が調査した青野Ａ地点の北側の調査であり，弥生時代の住居跡が検出される可能性がある。

亀岡条里制跡の調査では，昭和56年度の調査結果をふまえ，調査方法を検討する必要があり，篠窯跡群の調査では，三角窯などの小形の窯跡の存在を予想しこれまで以上に慎重な調査を実施する必要がある。

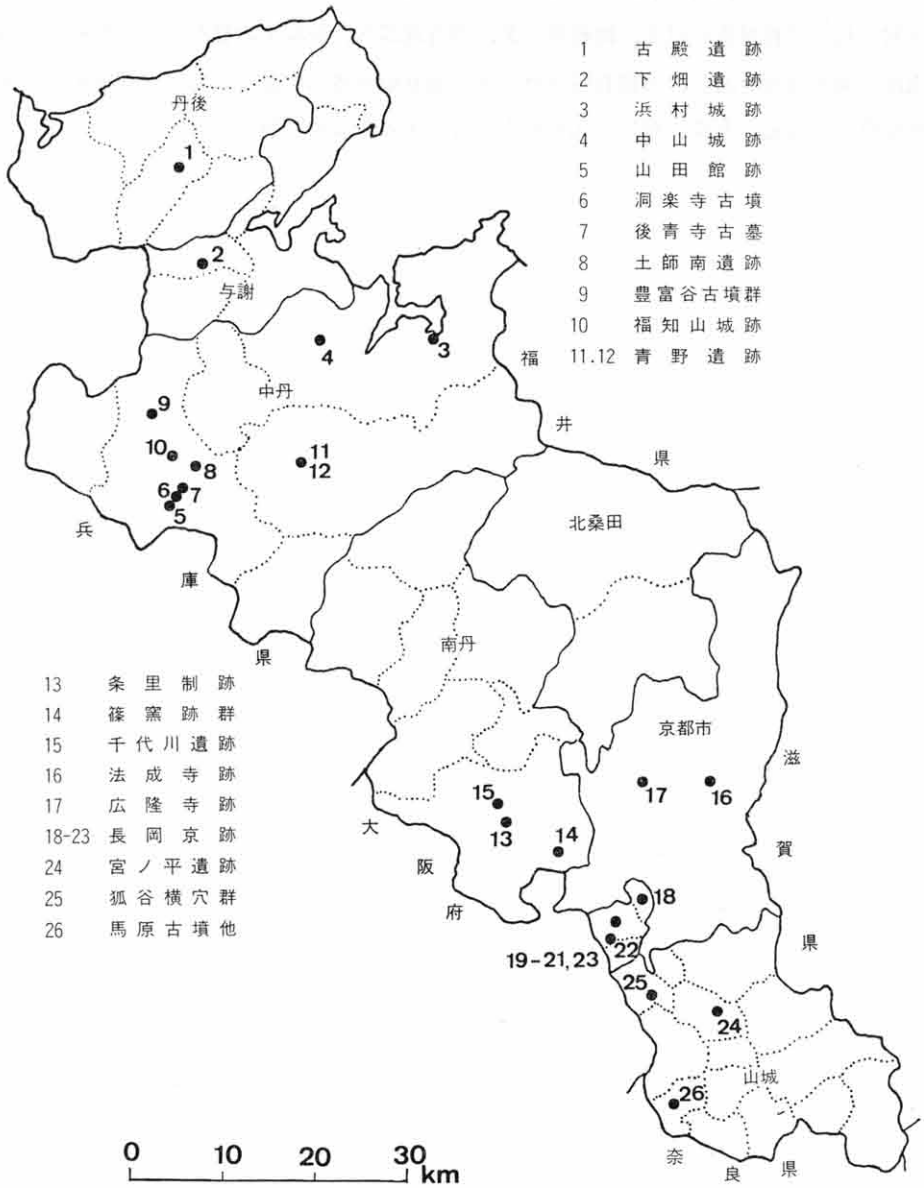
長岡京跡の調査は，毎年多くの機関が担当しているので，各機関の連絡調整を十分に行

い，調査の精度，内容等を高める努力を行わなければならない。

馬原古墳他は生駒山脈から派生する丘陵地の遺跡であるが，今後長期にわたる調査の初年度であるから，計画的調査を実施するための準備を整える必要がある。

番号	名称	種別員数	所在地	原因工事	調査対象面積	調査予定時期	備考
1	古殿遺跡	集落跡	中郡峰山町	府立高校校舎改築	m² 1,700	月 7～10	
2	下畑遺跡	散布地	与謝郡野田川町字三河内810	同上	2,000	6～7	昭和56年から継続
3	浜村城跡	城跡	舞鶴市	港湾整備	未定	8～10	
4	中山城跡	城跡	舞鶴市	府道改修	未定	8～10	
5	山田館跡	城跡	福知山市字大内小字山田	近畿自動車道建設	2,000	5～7	
6	洞楽寺古墳	古墳	福知山市字大内小字洞楽寺	同上	400	7～8	
7	後青寺古墓	古墓	福知山市字大内小字後正寺	同上	400	5～7	
8	土師南遺跡	散布地	福知山市字土師小字南町	府立高校校舎改築	1,500	6～7	昭和56年から継続
9	豊富谷遺跡群	古墳他	福知山市字半田他	国鉄福知山電車基地	—	5～58.3	昭和55年から継続 遺物整理のみ
10	福知山城跡	城跡	福知山市内記	会館建設	600	6～8	
11	青野遺跡	集落跡	綾部市青野町	橋梁改修		7～9	昭和56年から継続
12	青野遺跡	集落跡	綾部市青野町	由良川改修	4,700	7～10	
13	亀岡条里制跡	条里跡	亀岡市余部町，吉川町	国道9号バイパス建設	140,000	5～58.3	昭和56年から継続
14	篠窯跡群	窯跡	亀岡市篠町他	同上		5～58.3	昭和52年から継続 試掘調査を含む
15	千代川遺跡	集落跡	亀岡市千代川町	府道改修		9～12	
16	法成寺跡	寺院跡	京都市上京区中御霊町424	府立医科大学改築	1,000	7～10	昭和56年から継続
17	広隆寺跡	寺院跡	京都市右京区太秦蜂ケ岡町	警察署改築	—	4～8	昭和56年から継続 遺物整理のみ
18	長岡京跡	都城跡	向日市	公民館建設		6～9	
19	長岡京跡	都城跡	長岡京市 乙訓郡大山崎町	電話線敷設		4～58.3	立会調査
20	長岡京跡	都城跡	長岡京市今里	都市計画道路建設		7～10	昭和56年から継続
21	長岡京跡	都城跡	向日市上植野町 長岡京市馬場	国道改修	400	9～11	
22	長岡京跡	都城跡	長岡京市又は大山崎町	府立高校建設	未定	8～58.3	
23	長岡京跡	都城跡	長岡京市今里	府道建設		7～12	昭和56年から継続
24	宮ノ平遺跡	古墳他	城陽市寺田小字宮ノ平	宅地造成	—	4～9	昭和56年から継続 遺物整理のみ
25	狐谷横穴群	横穴	八幡市美濃山小字狐谷	学校建設	—	4～9	昭和56年から継続 遺物整理のみ
26	馬原古墳他	古墳4 散布地	相楽郡精華町	区画整理		7～12	

昭和57年度　発掘調査予定の遺跡一覧表



昭和57年度発掘調査予定遺跡位置図

以上、昭和57年度の発掘調査のいくつかについて簡単にその心がまえをのべたが，これらの発掘調査に伴う現地説明会の実施，府下関係機関の埋蔵文化財担当職員を中心とした研修会の開催，府民を対象とした講演会の開催，調査結果の速報を兼ねた本機関誌の刊行等々，発掘調査と並ぶ普及啓発事業も又多彩である。

これらの事業を担当するため，昭和57年度に総務課1名，調査課6名，計7名を増員し，事務局長（常務理事）以下，総務課5名，調査課27名，計33名の職員が，京都府下の各種遺跡の発掘調査を通じ，当調査研究センター設立趣意書に明記された「京都府の歴史の解明に寄与するとともに，府民文化の向上に寄与する」ために努力したいと念願している。

昭和56年度京都府下埋蔵文化財の調査

堤　圭三郎

京都府下における埋蔵文化財の発掘調査は年ごとに増加しており，京都府教育委員会が集計した昭和56年度の発掘調査届出書及び通知書の件数は190件に達している。これらの調査を実施しているのは，京都府教育委員会，各市町村教育委員会，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，平安博物館，京都大学及び同志社大学の学内調査委員会等であるが，昭和56年度から当調査研究センターもその業務を担当することになった。

当調査研究センターが行うのは，「国，公社，公団及び京都府等が行う開発工事に伴う遺跡の発掘調査」であり，昭和56年度には関係機関から21件の調査委託があった。(注1) 1件につき複数の遺跡を対象としているものもあるので，実際に発掘調査を実施した遺跡は別表のとおり38件，62か所に及んでいる。これらの調査は昭和55年度までは，ほとんど京都府教育委員会が実施していたものである。

本稿では，まず，当調査研究センターが実施した調査の概要について，つぎに，各市町教育委員会等が実施した調査のうち主なものについてのべることにする。

別表の2**中尾古墳**は伊根港を望む標高約26mの丘陵上にある古墳で，南に開口する長さ7.5m，幅1.3～1.5mの短冊形の横穴式石室をもつものであった。出土遺物は須恵器杯蓋・高杯，鉄刀，鉄鏃などであり，6世紀後半に築造されたものである。丹後半島の東端を占める伊根町は，海に面して急崖をなすところが多く，広範な可耕地の無いところであり，これまでの分布調査でも古墳時代の遺跡は知られていなかったが，今回の調査で小規模ながら典型的な横穴式石室が確認された。このように海に面した急崖のわずかな平坦部を利用した古墳として，丹後町大成古墳があるが，丹後半島の海岸線に沿って，この種の古墳が築造された可能性は高いものと思われる。

別表の5大道寺跡，6論田2号墳他，7セイゴ1号墳他，8狸谷1号墳他の4件は，日本国有鉄道の福知山電車基地建設に伴う調査であり，これまで「豊富谷丘陵遺跡群」として既に数回にわたり調査結果の報告を行ってきた。昭和54年度の分布調査により，古墳74基，寺跡2か所，城跡5か所計81か所の遺跡を確認し，このうち工事予定地区に入る古墳30基，寺跡1か所，城跡3か所計34か所の調査を実施することになった。現地調査は，昭和55，56年度の2か年にわたって行ったが，樹木の伐採後さらに多くの古墳が検出され，実際に発掘調査を実施したのは，古墳47基，寺跡2か所，城跡1か所計50か所の多くにのぼった。

昭和56年度京都府下埋蔵文化財調査地位置図

大道寺跡は，丘陵先端部の一部を削り他を盛り土し，上下2段に約100㎡の平坦面を作り，上部平坦面に4間×3間，下部平坦面に4間×4間のそれぞれ総柱の建物跡が検出された。この2棟の建物跡はそれぞれ建て替えられていた。さらに，工事予定地外であるがこの2棟の建物跡が検出された平坦面の南側丘陵最頂部には，さらに広い平坦面があり，ここに主要な建物が建っていたものと思われる。これらの建物群の東側に当る丘陵稜線上

番号	名称	種別 員数	所在地	担当者	調査期間	概要	備考
1	橋爪遺跡	集落跡	熊野郡久美浜町橋爪	戸原　和人	月 8～10	木製品出土	現説資料 8105 情報 3-p. 39
2	中尾古墳	古墳	与謝郡伊根町亀島字大浦中尾	久保田健士	8～10	6C後半横穴式石室	現説資料 8104 情報 3-p. 43
3	下畑遺跡	散布地	与謝郡野田川町字三河内810	竹原　一彦	9	顕著な遺構なし	情報 3-p. 45
4	稚児野遺跡	散布地	天田郡夜久野町字井田小字稚児野	伊野　近富 竹原　一彦	10～11	顕著な遺構なし	中間報告 8107 情報 3-p. 46
5	大道寺跡	寺院跡	福知山市字今安小字大道	竹原　一彦	5～8	中世建物4棟	現説資料 8102 情報 2-p. 1
6	論田2号墳他	古墳	福知山市字半田小字論田他	増田　孝彦	5～ 57.3		
7	セイゴ1号墳他	古墳	福知山市字笹尾小字セイゴ	増田　孝彦	5～ 57.3		
8	狸谷3号墳他	古墳	福知山市字半田小字狸谷他	増田　孝彦	5～ 57.3	谷尾谷1号墳より内行花文鏡出土	
9	大内城跡	城跡	福知山市字大内小字平城	伊野　近富	6～ 57.3	平安時代館跡	中間報告 8101 〃 8102 現説資料 8202 情報 3-p. 8
10	後青寺跡	城跡	福知山市字大内小字後正寺	辻本　和美	8～9	戦国期郭跡	
11	宮遺跡	集落跡	福知山市字宮小字城ノ尾	辻本　和美	10～12	中世墓地	現説資料 8202
12	土師南遺跡	散布地	福知山市字土師小字南町	辻本　和美	7	顕著な遺構なし	情報 2-p. 41
13	宮の下遺跡	集落跡	加佐郡大江町字三河小字宮の下	竹原　一彦	10～ 57.3	出土遺物整理	
14	青野遺跡	集落跡	綾部市青野町	増田　孝彦	57.3	弥生竪穴住居跡	
15	園部城跡	城跡	船井郡園部町小桜97	引原　茂治	7～10	近世城郭，方墳周濠，埴輪片	中間報告 8103 情報 3-p. 48
16	千代川遺跡	集落跡	亀岡市千代川町	村尾　政人	5～7	古墳時代竪穴住居跡	現説資料 8101 情報 2-p. 15
17	亀岡条里制跡	条里跡	亀岡市吉川町	村尾　政人 引原　茂治	10～ 57.3		
18	南金岐遺跡	集落跡	亀岡市吉川町南金岐	村尾　政人	10～11	弥生溝状遺構土器片多量	
19	西長尾窯跡	窯跡6	亀岡市町大篠字篠小字西長尾	石井　清司 久保田健士	6～ 57.3	登窯3，構造不明1 楕円窯1 三角窯1	現説資料 8103 〃 8107 情報 2-p. 8
20	広隆寺跡	寺院跡	京都市右京区太秦蜂ケ岡町	石尾　政信	7～8 1～3	梵鐘鋳造遺構	
21	平安宮跡	宮殿跡	京都市中京区西ノ京式部町1	石尾　政信	9～10	顕著な遺構なし	情報 3-p. 51
22	平安京跡	都城跡	京都市上京区中立売小川東入	竹井　治雄	9～10		情報 3-p. 52
23	法成寺跡	寺院跡	京都市上京区中御霊町424	長谷川　達	57.3	墳墓多数検出	
24	黄金塚2号墳	古墳	京都市伏見区桃山町遠山50	久保田健士	11～12	埴輪片出土	情報 3-p. 54
25	長岡京跡	都城跡	長岡京市今里4丁目	山口　博	6～7	右京76次	情報 2-p. 42
26	長岡京跡	都城跡	長岡京市井ノ内朝日寺	山口　博	8	右京78次	情報 2-p. 45
27	長岡京跡	都城跡	長岡京市友岡1丁目1-1	山口　博	8	右京79次	情報 2-p. 46
28	長岡京跡	都城跡	長岡京市長岡3丁目，今里舞塚他	山口　博	10～ 57.3	右京83次	現説資料 8203

番号	名　称	種別員数	所　在　地	担当者	調査期間	概　要	備　考
29	長岡京跡	都城跡	長岡京市今里4丁目，今里庄ノ淵	石尾　政信	11～12	右京84次	
30	長岡京跡	都城跡	乙訓郡大山崎町下植野五条田	竹井　治雄	11～12	右京87次	情報 3-p. 50
31	長岡京跡	都城跡	向日市上植野南淀井 長岡京市馬場北石ケ町	竹井　治雄	57.2	左京83次	
32	長岡宮跡	宮殿跡	向日市寺戸町古城他	竹井　治雄	57.3	宮城119次	
33	羽戸山遺跡	集落跡	宇治市菟道小字羽戸山他	小山　雅人	7～11	竪穴住居跡，土壙墓	現説資料 8106 情報 3-p. 55
34	宮ノ平遺跡	古墳他	城陽市大字寺田小字宮ノ平	大槻　真純	1～3	方墳，埴輪棺	中間報告 8201
35	木津遺跡	散布地	相楽郡木津町木津	大槻　真純	7	中世土壙	中間報告 8104 情報 2-p. 39
36	内田山古墳	古墳1	相楽郡木津町木津小字今城	大槻　真純	9	方墳，埴輪片	情報 3-p. 57
37	前椚古墳	古墳1，墳墓	相楽郡加茂町尻枝小字前椚	戸原　和人	12～57.2	円墳，横穴式石室	現説資料 8201
38	狐谷横穴群	横穴8	八幡市美濃山小字狐谷	久保田健士	57.1～3	7C初頭	中間報告 8203

昭和56年度　発掘調査実施遺跡一覧表

には，経塚1基，火葬墓27基が検出され，鋳銅経筒1，竹製経筒2，和鏡1などのほか経巻も出土した。古墓，経塚と一体をなす丘陵上の建物跡は，寺院の建物跡と推定され，鎌倉時代を中心とする中世前半に当丘陵上に一大伽藍が存在したことが明らかになった。

丘陵稜線上に築かれたたくさんの古墳は，隣接する古墳の裾部に一条の溝を掘るものや，斜面の上部を溝で画するもの等があり，大きな封土を築くものはほとんどなかった。主体部も大小さまざまの土壙墓であった。出土遺物の主なものは，土師器の高杯・壺，鉄剣，鉄鏃等であったが，狸谷17号墳から鏡片が，谷尾谷1号墳から内行花文鏡1面が出土したのが注目された。この豊富谷丘陵古墳群は，福知山地方における古墳築造の初期の段階の様相を知る上で貴重なものである。

別表の9大内城跡，10後青寺跡，11宮遺跡の3件は，近畿自動車道舞鶴線建設工事に伴うもので，当地域では既に昭和54年度から一連の調査を実施している。

大内城跡は，東の山塊から西の沖積平野に向って延びる丘陵の稜線部を占める大規模な城郭跡である。昭和53年度に実施した分布調査で，東側の空堀，北側の土塁，南側の犬走り状の平坦面，沖積平野を望む最西端の土塁に囲まれた2か所の郭跡，小字名の「平城」などを総合し，中世の平山城と推定した。道路建設予定地は，城跡の東端，標高約77mの付近に当り，ここは城跡の本丸に当る場所であると推定し，南北約100m，東西約45mの範囲を発掘調査した。その結果，建物跡9棟をはじめとして，井戸2基，空堀，土塁，柵，土壙，火葬墓などの遺構を検出した。さらに，これらの遺構の東北隅に，墓地があること

もわかった。しかもこれらの建物跡のほとんどは平安時代末期から鎌倉時代初期のもので，主屋，副屋，倉庫，馬屋などの機能をもち，6間×4間の規模をもつ主屋とそれぞれの建物配置の雄大さから，有力な豪族の館跡と考えることができる。東北隅の墳墓はこの館の主の奥津城であったのだろう。また，南北朝期には，南北両面にあった空堀を埋め土塁を構築し，中世的城郭構造に改めていること，さらに，丘陵最西端には，約1200㎡の部分を土塁と空堀で台形に囲む戦国期特有の郭が遺存していることから，この東西に延びる丘陵地全体が古代末から戦国期にかけて，館として城として利用されていたことが判明した。しかも，常に防禦的性格を具えていたということは，当地域及びその周辺の勢力関係が緊張していたことを示すものであり，当地域の歴史を解明する上で大きな示唆を与えるものである。

当調査研究センターでは，大内城跡の調査結果のもつ意義を強調し，日本道路公団及び京都府教育委員会に対し保存についての検討を依頼しており，現在関係者間で検討，協議されている。

別表の16千代川遺跡，17亀岡条里制跡，18南金岐遺跡は，国道9号バイパス建設工事のうち建設省施工部分の調査であり，関連の調査は既に昭和50年度から継続して行われている。**千代川遺跡**では古墳時代の竪穴住居跡4基，掘立柱建物跡1棟，溝状遺構などが検出され，亀岡地方で数少ない古墳時代集落跡の1例を加え，**南金岐遺跡**では，溝状遺構の内部から多量の弥生式土器が出土し付近一帯に弥生時代の大規模な集落跡があることがわかった。**亀岡条里制跡**の調査では，現存の道路及び水路に直交するトレンチを入れその断面を観察したが，現存の道路及び水路の直下では顕著な遺構を確認することができず，他のトレンチでも条里制跡に伴うと思われる遺構を確認することができなかった。今後も引き続き実施することになる条里制跡の調査方法等について，ここで改めて検討する必要がある。

別表の19西長尾窯跡は，国道9号バイパス建設工事のうち日本道路公団施工部分の篠窯跡群を対象とする発掘調査であり，関連の調査は既に昭和52年度から継続して行われている。**篠窯跡群**で西長尾窯跡6基を含め昭和56年度までに実施した窯跡は17基であり，このうち窯体の構造が明らかなものは12基であった。登窯6基，三角窯5基，楕円窯1基である。昭和56年度に調査した西長尾窯跡では，1，3，4号窯が登窯，5号窯が楕円窯，6号窯が三角窯であり，2号窯は窯体の構造が消滅していた。5号窯は東西の長さ2.4m，南北の幅1.4mの楕円形を呈する特殊な窯で，床面はわずかに傾斜し，上位に当る東端に煙出しを，下位に当る西端に2か所の焚口をもつものであった。床面に直径10cm，長さ25～30cmの粘土を焼き固めた円柱状の支柱を15～16本立て，その支柱の上部に拳大にちぎった不定形の粘土塊を置き，上部の床面を形成していた。拳大の不定形な粘土塊は完全に環元

焼成され互いに密着していたが，その接ぎ目に不定形な小孔があり，焚口から下部床面を這った炎が，この小孔を通して上部床面に吹き上がる構造のもので，いわゆるロストルを備えたものであった。

6号窯は5号窯の南西に接して築かれた1辺2.4mの三角窯であり，床面は5号窯の床面より約50cm低く，かつ壁面の一部が5号窯壁面の下部になっていたことから，6号窯の操業が停止された後，5号窯が構築されたことがわかる。また，5号窯床面には6号窯と同じ円柱上の支柱が4本残り，煙出しの付近でも5号窯と同じ上部床面の一部が遺存していたので，この窯もロストルを備えていたものと考えられる。

篠窯跡群で，最初に発見された三角窯は黒岩1号窯(注2)であり，その内部から緑釉陶器が多数発見されたことで，三角窯は緑釉施釉のための2次的窯であると推定していたが，ロストルを備えることで須恵器をも焼成することが可能であったと考えられる。ちなみに，これまで調査した窯跡のうち，登窯は9世紀を中心とし，最も新しい西長尾3号窯で10世紀前半と考えている。10世紀後半以後の構築と考えているものは，すべて小形の三角窯及び楕円窯である。このことは篠窯跡群全体の調査を行っていない現段階で，軽々しく断定するわけにはいかないが，10世紀中項に篠窯跡操業にまつわる一大転期があったものと想像することができる。

西長尾5，6号窯で確認したロストルを備えた窯の構造は，篠窯跡群調査においても画期的なものであったから，日本道路公団及び京都府教育委員会に対し，保存の要望をし，現在関係機関でその検討が行われている。

別表の20**広隆寺跡**の調査では，一辺2.5m，深さ1.2mの正方形の穴の底部に直径1.17mの円形の鋳型の痕跡があったことから，梵鐘鋳造の遺構と考えた。その直後，京都大学構内遺跡の調査でも同種のものが検出され注目された(注3)。広隆寺跡の梵鐘鋳造遺構は，鋳型の残存部分だけを樹脂でかためて取り上げ，昭和57年度に展示可能な状態にしたいと考えている。

平安京跡では各地で多くの発掘調査が行われたが，その結果については，財団法人京都市埋蔵文化財研究所の報告を待つこととしたい。長岡京跡では，当調査研究センターも8か所の調査を行ったが，向日市，長岡京市，大山崎町の各教育委員会でも調査を実施しており，新しい事実が確認されているので，長岡京跡調査研究所（中山修一代表）とも協力し，長岡京跡の昭和56年度調査結果を別にまとめることとしたい。

別表の33**羽戸山遺跡**の調査では，弥生時代，古墳時代の竪穴住居跡各1基，弥生式土器を埋納する土壙，出土遺物をほとんど伴わない土壙墓群が，それぞれ異る丘陵上で検出され，丘陵上部における弥生時代の遺構の新しい例を加えた。

別表の34**宮ノ平遺跡**では，丘陵上部の平坦面を利用した方墳１基と方形周溝墓１基のほか埴輪棺１基も検出され，既に昭和46年に発掘調査された宮ノ平古墳群の一部であることがわかった。

別表の36**内田山古墳**も丘陵上の方墳であり，その周濠部から家形埴輪片を含む多量の埴輪が出土した。

別表の37**前椚古墳**は，直径19mの円墳で，南西に開口する横穴式石室が完全な形で発見された。石室は玄室の長さ５m，幅1.3m，高さ２m，羨道の長さ５m，幅1.2m，高さ２mを測り，羨道の壁面が玄室に向って左側で狭くなる片袖式の石室であった。古墳の東南部には，一部墳丘の裾に接して10基の中世墓があり，そのうち７号墓から短刀，青磁椀などが検出され注目を集めた。この古墳がほぼ完全な形で遺存し，南山城地方の典型的な横穴式石室であることから，京都府道路建設課及び京都府教育委員会に対し，現状保存を要望し、現在その保存方法について関係機関で検討中である。

別表の38**狐谷横穴群**の調査は，京都府立高校の建設に伴う事前調査であった。八幡市南部から田辺町北部にかけては，美濃山，荒坂，松井，堀切などの横穴群が知られていた。府立高等学校予定地は，西から東へ延びる台地性の丘陵突端部であり，全面を孟宗竹が覆い地表面はその土入れ等により各所に段や穴があった。予定地の西方約60mの地点に横穴２基が現存しているので，あるいは一群の横穴が高校予定地にも存在するのではないかと推定して発掘調査を行った。その結果，現在平坦な台地状を呈している部分は，もとは西から東へ延びる細長い丘陵であり，その南側斜面に横穴が隣接して築かれていることがわかった。各横穴の間隔は約４mで，もし等間隔で築かれているとすれば，総数約25基にも及ぶ一大横穴群であると考えられる。しかも各横穴の前面には狭長な羨道があり，それぞれの羨道を結ぶ墓道とも呼ぶべき平坦面があり，横穴群の構成に新たな知見を加えることになった。各横穴には２～３体の複数の埋葬があり，多量に出土した須恵器，土師器から，７世紀初頭の短期間に営造されたものであることを知ることができ，地域色であるにせよ古墳時代終末期の埋葬形態の特色を窺うことのできる貴重な資料が得られたことになる。

以上当調査研究センターが昭和56年度中に実施した発掘調査の中から，いくつかを選んでその概要をのべたが，各調査の詳細は，現地説明会資料，中間報告，本情報各号に掲載する調査略報及び年度末に刊行した京都府遺跡調査概報等を参照していただきたい。

つぎに，府下各地で市町教育委員会等が主体となって行われた発掘調査のいくつかを選んで説明することにしたい。

丹後地域では，久美浜町湯舟坂古墳，丹後町大山古墳群，弥栄町奈具丘遺跡，いもじや古墳，峰山町扇谷遺跡，七尾遺跡，宮津市中野遺跡，加悦町河辺古墳，舞鶴市志高遺跡，

田辺城跡を対象とした発掘調査が行われた。

湯舟坂古墳(注4)は，金色燦然たる金銅装環頭大刀が出土し，新聞紙上を大きく飾った古墳である。この古墳は，川上谷川の左岸谷あいにある総数100基にも及ぶ須田古墳群の最も奥に位置する古墳である。全長10.6m，玄室の長さ5.7m，幅2.1～2.5mにも及ぶ大きな横穴式石室をもつ直径18mの円墳であった。さきに記した金銅装環頭大刀をはじめ圭頭大刀，直刀，刀子，鉄鏃などの武器，馬具，玉類，須恵器，土師器など多量の副葬品が出土した。とくに須恵器は総数200個にも及び，一つの石室から出土した量としては最も多く，その種類も豊富であり，丹後地方の須恵器研究にとっては特に重要な資料となるものである。

大山古墳群(注5)は，竹野川を見おろす丘陵上にあり，丘陵稜線部を利用して築かれた方形台状墓10基と古墳2基からなる。方形台状墓は丘陵の稜線に直交する溝で各墓域を画し、方形の台状に作り出したもので，その中央部だけでなく裾部あるいは溝中からも土壙墓が検出された。丹後地方では峰山町カジヤ遺跡でこの種の遺構が確認されていたが，このように丘陵稜線のすべてを占めて存在していることがわかったのはこの大山古墳群がはじめてであった。その意味では，この遺跡の調査後の取扱いとして今一歩保存の問題を掘り下げて検討すべきであったと思う。丹後地方においては丹後国営農場の造成など今後丘陵部分の開発が予想されているが，大山古墳群の調査結果を参考にして慎重に対処する必要がある。

扇谷遺跡の重要性については，既にのべたことがあるが(注6)，昭和56年度の調査は，都市計画道路杉谷―荒山線の建設工事の事前調査として行われた。竹野川を見降ろす最高部標高66mのやや独立した丘陵の斜面に延々と続く溝状遺構である。溝は断面V字形を呈し，標高44mから60mの間を上下しながら，丘陵頂部を取り巻くように続いている。昭和56年度の調査では延長150mにわたって溝内の土砂を除去したが，これまでの溝の横断面を確認した断片的な調査にくらべ，溝の全容がはっきりし，溝の規模，構造の雄大さには目を見はるものがあった。丘陵の斜面に掘られているため丘陵上位に当る部分は溝の壁面の高さが5mに及ぶ部分があり，その幅も広いところで6mに達するところがあった。溝内から掘り上げた土砂は丘陵の低位すなわち溝の外側へ積み上げて高い土堤としたものであろう。溝中から弥生前期末から中期前半の土器片が多量に出土し，ごく短かい期間に使用された後，放置されたものであることもわかった。このような大規模な溝状遺構が丘陵をとりまいていることは，何らかの防禦的性格を示すものとして，丹後地方弥生文化の性格に特に重要な意味を持つものといわねばならない。この遺跡の重要性については，各方面から強調されており，工事を担当する峰山町教育委員会，京都府教育委員会などでその保存方法について熱心な協議が行われている。

七尾遺跡は，扇谷遺跡と谷を一つ隔てた丘陵上にあり，扇谷遺跡と同時期の方形台状墓2基が検出された。扇谷遺跡を集落跡，七尾遺跡をその墓地と考えるなら両者は一体となった重要な遺跡であるといえる。

丹波地域では，綾部市青野遺跡，青野南遺跡，京北町周山瓦窯跡を対象とした発掘調査が行われた。

青野南遺跡(注7)では，東西8間×南北2間の建物跡を中心として，その他の建物跡及び柵列が相関連した規格により配置されていることから何鹿郡衙跡の可能性があると推定された。

周山瓦窯跡は，昭和55年度試掘調査が行われ，昭和56年度発掘調査が行われた。1，2号の窯体の構造が明らかにされ，2号窯では煙道が側面にあるという特異な構造がわかった。周山廃寺の瓦を焼成したと同時に須恵器をも焼成した瓦陶兼用の窯跡として注目される。

山城地域では，宇治市隼上り窯跡群，城陽市芝ケ原遺跡，久世廃寺，田辺町郷士塚古墳，加茂町恭仁宮跡，木津町木津遺跡を対象とした発掘調査が行われた。

隼上り窯跡群は，瓦陶兼用の登窯2基が検出され，飛鳥時代の瓦当が出土したことにより大きな注目をあびた。

恭仁宮跡の調査は京都府教育委員会が昭和48年度から継続して実施しているが，昭和56年度の調査では，講堂跡の南縁に当る基壇の一部が検出された。また，恭仁宮朝堂院に関するものと思われ，昭和55年度までに検出されていた南北に続く柵列がさらに南方に続き，東へ折れ曲っていることが確認された。この柵列は南北に116m続いていることになる。この柵列と重なって東西棟の掘立柱建物2棟が検出されたが，これを恭仁宮に関する建物跡とするか，山城国分寺に係るものとするか即断は困難である。恭仁宮跡の発掘調査は既に8年を経過し，水田耕作の合間をぬって実施されているが，その調査面積の全体に対する割合は未だ微々たるものである。一方加茂町教育委員会では，史跡山城国分寺跡の一部を買収にふみきった。将来，国分寺跡の全域の買収保存を考慮し，恭仁宮跡の発掘調査計画も再検討を要する時期にきていると思う。

以上，京都府下における昭和56年度の発掘調査を概観したが，本稿をなすに当って，各調査主体者が刊行された現地説明会資料が大いに役立った。特に，昭和56年の発掘調査では，これまでになく現地説明会資料の内容が充実していたと思う。現地説明会の一つの目的は，二度と見られぬ現地の調査状況を事実のまま公開することにある。そのために刊行される現地説明会資料は事実を簡潔に示すものであっていい。その意味では，近年現地説明会を担当する関係機関の職員が，迅速且つ的確に資料作成に努力している姿が窺えることは評価すべきことである。今後，これらの現地説明会資料を含めて，京都府下で行われた各遺跡の発掘調査の資料を集成していく努力を約束して，本稿の結びとしたい。

（堤　圭三郎＝当センター調査課長）

注1　堤圭三郎「昭和56年度発掘調査予定の遺跡」(『本誌』創刊号) 1981.9

注2　安藤信策，吉水真彦，樋口隆久「国道9号バイパス関係遺跡昭和52年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報 (1978)』，京都府教育委員会) 1978.3

注3　『京都大学教養部構内の遺跡』京都大学構内遺跡調査会，京都大学埋蔵文化財研究センター，1982.3

注4　久美浜町教育委員会『湯舟坂2号墳』(久美浜町文化財調査報告第6集) 1982.3

注5　丹後町教育委員会『大山古墳群現地説明会資料』1981.8

注6　堤圭三郎「昭和55年度京都府下埋蔵文化財の調査」(『本誌』創刊号) 1981.9

注7　中村孝行「青野・綾中地区遺跡群の調査」(『本誌』第3号) 1982.3

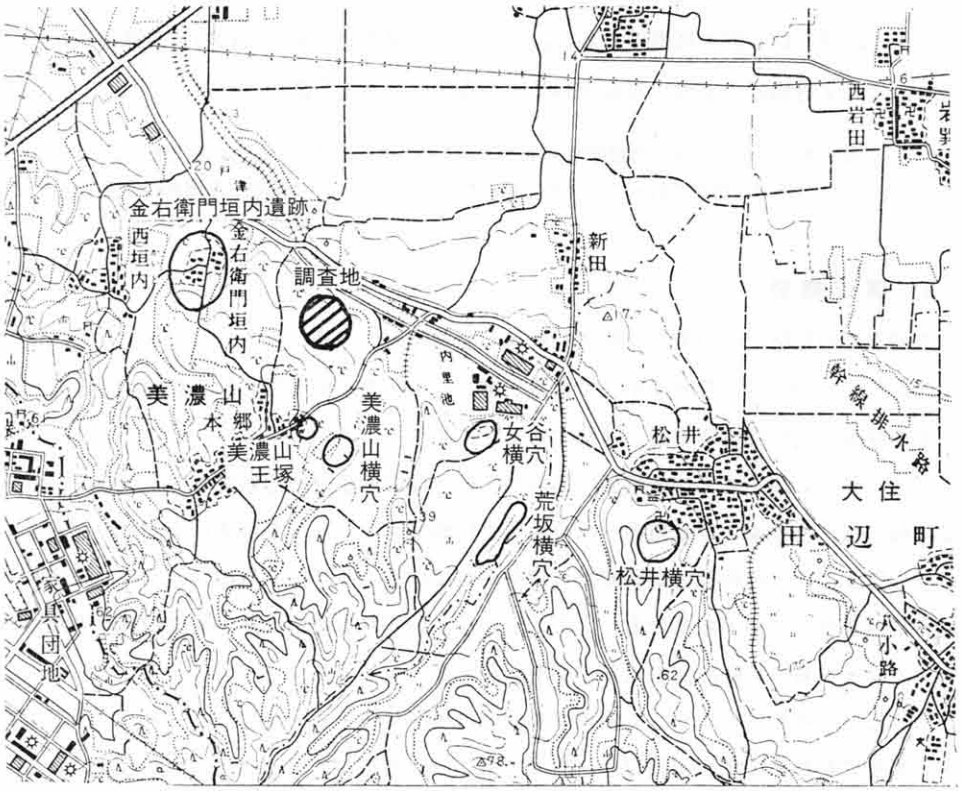
狐谷横穴群発掘調査概要 <図版1>

久保田 健士

1. はじめに

今回の調査は，八幡市美濃山に予定されている府立新設高校建設造成工事に伴う事前発掘調査である。調査地は，八幡市から田辺町にかけての丘陵東側にあたり，海抜30m前後のゆるやかな傾斜地である。この付近は，現在竹林として利用されているが，長年にわたる土入れ，土採りのため，当初旧地形を推測することが容易ではなかった。しかし，古くからこの周辺では，横穴群の存在が知られており，また弥生土器・石器の散布地があるなど，当該地でも遺構・遺物の存在が十分予想され，発掘調査の必要が生じた。

調査は，当調査研究センター調査課の長谷川達，辻本和美，村尾政人，久保田健士が担当し，昭和57年1月25日から同年4月28日まで行った。実施にあたっては，地元八幡市教



第1図 調 査 地 位 置 図 (1/25,000)

育委員会をはじめ多くの方々の御協力を得た。

2. 調査経過

調査は，竹を伐採したのち東西・南北の方向にそれぞれ数本ずつのトレンチ（幅約3m）を入れ，掘削を始めた。その結果，調査地の南半分のトレンチにおいて，北から南へ下る斜面を確認した。そして，その砂礫層の斜面で，古墳時代後期の須恵器を含む暗茶褐色土の広がり（短冊状）を検出した。横穴の墓道部分である可能性がでてきたため，掘削範囲を広げ旧地形の検出・復元に努めた。それにより，東へのびる2つの丘陵支脈にはさまれた谷部の北斜面を検出し，そこに10か所の暗茶褐色土の短冊状の広がりを認めた。そして，一部で空洞を確認することができ，横穴群の存在が確定的となった。

そこで，横穴の墓道・玄室の埋土の除去にとりかかった。その結果，誤認の1基と未調査の1基を除いた8基についてその内容が把握できた。その概略は，後の項でふれることとするが，今回の調査で多数の須恵器・土師器・鉄器・人骨等が出土した。さらに，7～9号横穴の墓道前庭部を精査した際，地山層を削平した幅約80cmのテラスが検出され，墓道と斜交して走ることが判明した。

以上が，横穴群の調査経過であるが，それらの北東方向の地点では方形周溝遺構が検出され，また2号横穴の東側では長方形の炭を充填した土壙が認められた。

（注）横穴群の存在が確定した段階で，東側より1号，2号，3号……と呼称したが，1号横穴については誤認であった。また，10号横穴については，現段階で未調査のままである。

3. 調査概要

本横穴群の概略について，「横穴一覧表」を参照しつつ述べることとする。なお，横穴の各部位については，埋葬の中心である玄室，その閉塞部位と思われる玄門，そしてそれに至る狭長な前庭部分を墓道と呼称することにする。

まず，横穴の造られている地盤であるが，砂・礫の堆積層で比較的もろい地質である。2号横穴は，玄室および墓道の一部を砂質土に構築しており，また3号横穴は，玄室天井部が砂質土，その他の部分が砂礫層に構築されている。4号～9号については，いずれも砂礫層を掘削して造られている。このことから，いずれも玄室天井・側壁の剝落等が認められ，2・3号の場合，玄室天井が陥没状態であった。

次に横穴の形態であるが，玄室の遺存状態の良好な4・6・9号をみると，平面形において奥壁にむかって広がる長台形，断面ではアーチ形をしていることが判明した。また，縦断面では，奥壁部が高く玄門に向って低くなっている。その他の横穴についても，ほぼ

同様な形態であると考えられる。玄門については，崩落した横穴については明瞭でないが，アーチ形をしていたと思われる。墓道は，埋土の堆積から考えても天井を持たなかったようで，巾が1m前後で断面逆台形の「切通し」としてある。また，9号横穴裾に検出されたテラスは，巾約80cmで7号横穴裾付近から南斜面を斜交して走っている。その性格については，十分な検討が必要だと考える。

玄室の埋葬面は，2・5・7・8・9号横穴において玄門付近で墓道面より一段高くなっていたことが注意された。また，2号横穴では，その段に伴って巾約20cm程度の小溝が検出された。なお，埋葬面の段は，砂層・砂礫層が交互に堆積する地山層の特色を利用して削り出されたものと判断された。

出土した遺物は，整理作業が完了していない現在では，個々の遺物について詳述することはできないが，その概略は，須恵器・土師器が80個体程度（内完形は70点）であり，金環4点，鉄刀3振り，鉄小刀1振り等である。土器の器種は，須恵器の杯身・蓋・高杯・壺（長頸・短頸）・平瓶・甕，土師器の椀・高杯・小型甕・皿，さらに黒色土器（3号横穴の玄室）である。鉄刀では，9号出土のものが，鞘尻金具とつり金具を伴っていた。そして，人骨であるが，腐食がひどく正確に把握しがたかったが，15体以上（頭蓋の数から推測）と思われる。特に，8号横穴では，7体分程（埋葬面では3面認められた）を検出した。

土器の出土状況は，主として玄室の玄門寄りで検出され，須恵器の甕・土師器の皿と椀が墓道から出土した。そして，2号横穴を除きいずれもがいくつかの土器が重なり合った状態で検出された。2号横穴の場合は，玄室埋葬面の玄門寄りの地点で右側（奥壁に向か

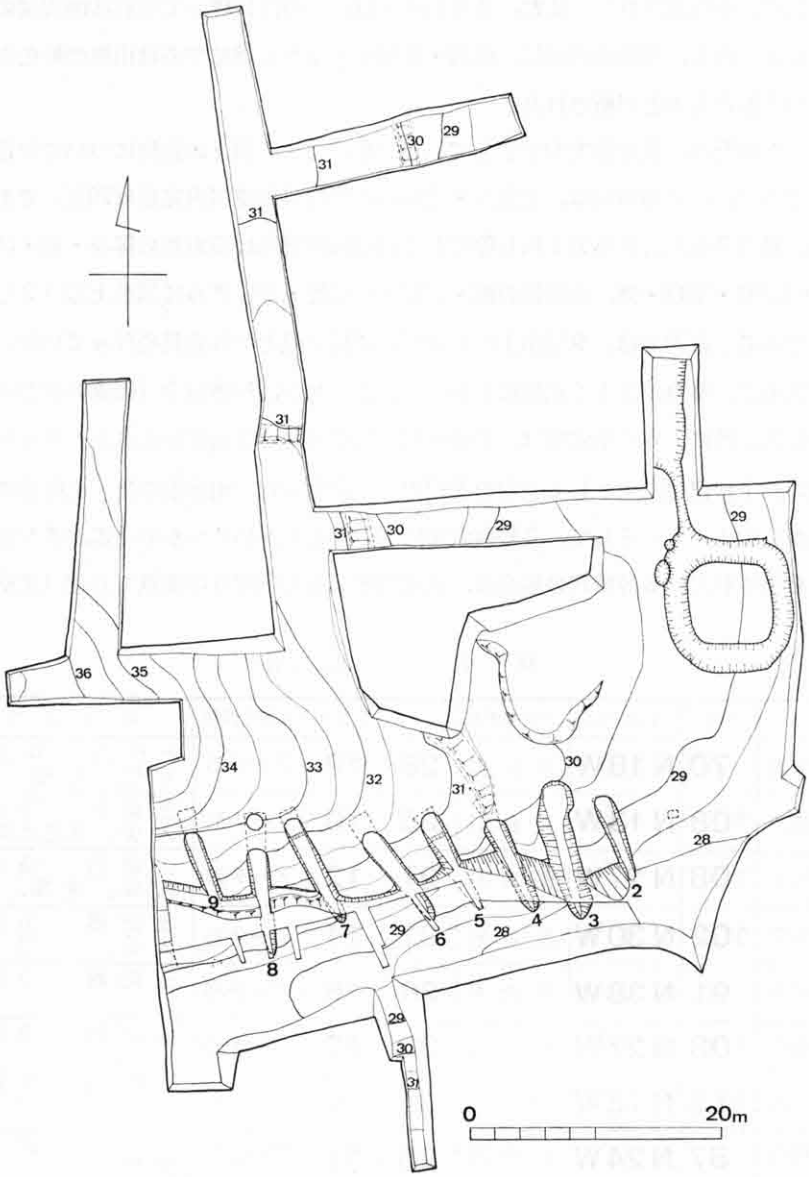
横　穴　一　覧　表

	全長	主軸方位	玄室平面形	玄室長	玄室巾	玄室立面形	出土遺物
2号横穴	7.0	N 18°W	長台形	2.8	1.0	アーチ形	土師器　須恵器 人骨、金環、鉄刀
3号横穴	10.8	N 13°W	長台形	3.5	1.0	アーチ形	土師器　須恵器 人骨、黒色土器
4号横穴	10.8	N 27°W	長台形	2.7	1.2	アーチ形	土師器　須恵器 人骨、金環、鉄釘
5号横穴	10.2	N 30°W	長台形	3.1	1.4	アーチ形	土師器　須恵器 人骨、炭
6号横穴	9.1	N 38°W	長台形	2.6	1.6	アーチ形	土師器　須恵器
7号横穴	10.8	N 27°W	長台形	3.2	1.0	アーチ形	土師器　須恵器
8号横穴	11.5	N 13°W	長台形	3.4	1.0	アーチ形	土師器　須恵器
9号横穴	8.7	N 24°W	長台形	2.5	1.1	アーチ形	人骨　鉄刀 金環

（注：単位m　玄室巾は奥壁部）

い）に須恵器，左側に土師器，そして墓道中央に土師器椀というふうに，示唆に富む状態で検出されたのが注意された。

以上が横穴群の概略であるが、全体として横穴間がほぼ等間隔で比較的整然と並んでいることが印象的である。そして，10号横穴（未調査）の西方約50mの地点で既に確認されている2基の横穴も，今回調査したものとあわせて美濃山狐谷横穴群を構成すると考えられる。これら横穴群以外での成果は，2号横穴の東約4mの地点で検出された炭を充塡し



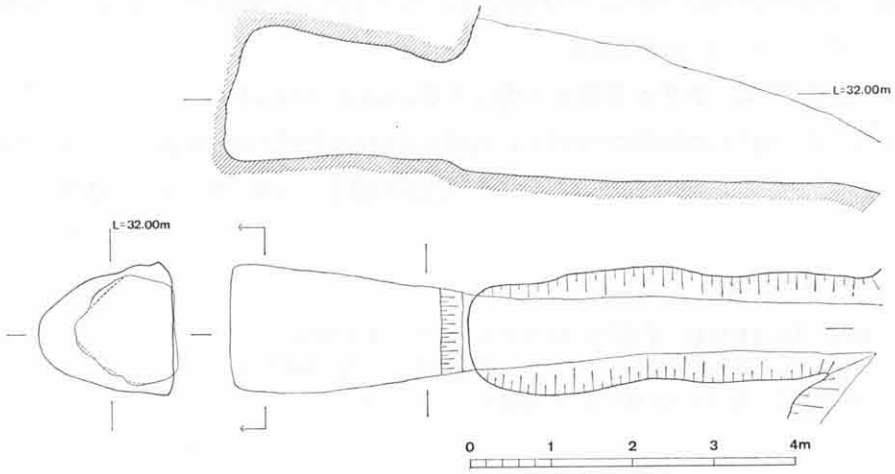
第2図　調　査　地　地　形　図

た土壙があり，約50cm×約80cmの長方形をしており須恵器の杯身・蓋のセットが出土した。また，横穴群の北東方向で検出した方形の周溝遺構は，主体部は確認されていないが「墓」の可能性も考えられる。周溝内埋土からは，須恵器の杯身の破片等が出土した。さらに調査地に至る進入路の造成の際，須恵質の埴輪円筒が出土した。

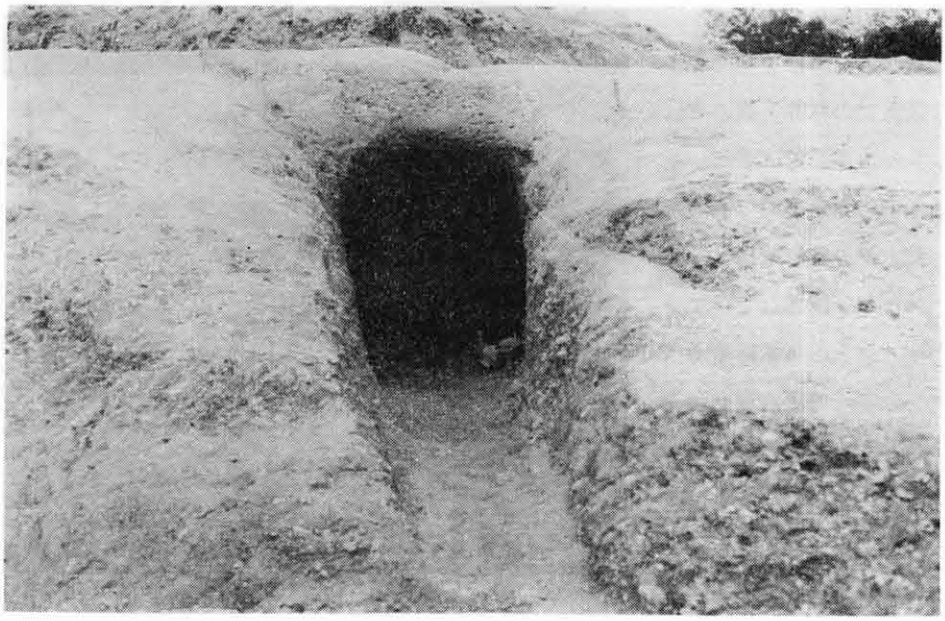
2 号 横 穴 全 景（南から）

4. む す び

今回調査を実施した美濃山狐谷横穴群は，当初予想していたよりも良好な状態で検出されたこともあり、多くの知見と課題を提供すると思える。十分な整理と検討をしていない現段階では，多くのことについて述べることはできないが，若干のまとめをすることとする。



第3図 9 号 横 穴 実 測 図



4　号　横　穴　全　景（南から）

① 出土遺物等から判断して，築造時期は，6世紀末から7世紀初頭にかけてと考えられ，その後も追葬・再利用がなされた。

② 横穴の形態が，簡略であり，畿内でよく知られる大阪府高井田横穴との差異が注目される。

③ 人体を埋葬した玄室の床面が墓道部より一段高くなっているものとそうでないものがある。

④ 副葬品の配置について、2号横穴の出土状況等から土器の供献に関し、何らかの示唆をくみとることができる。

⑤ 各横穴を結ぶテラス（「道」）を想定する手がかりが得られた。

などである。残された課題については，後日あらためて整理し取り組みたいと考えている。

（久保田健士＝当センター調査課調査員）

<参　考　文　献>

池上　悟　『横穴墓』（『考古学ライブラリー』6）　昭和55年
平良泰久　「南山城の後期古墳と氏族」（『京都考古』14）　昭和50年
田辺昭三　『陶邑古窯址群』Ⅰ　昭和41年

豊富谷丘陵遺跡発掘調査概要 <図版2>

増田孝彦

1. はじめに

本調査は、国鉄福知山線及び山陰本線の複線電化のための電車基地建設工事に伴う発掘調査である。

昭和56年度の調査対象地は、福知山市字笹尾・新庄・半田・今安の4地区であり、昭和54年度の分布調査で予定地内に墳墓21か所・城跡3か所・寺跡1か所が確認されており，伐採等によって墳墓4か所がふえ，墳墓関係だけで計26か所の調査を行った。発掘調査は，昭和56年6月10日～昭和57年3月6日まで実施した。ここでは墳墓のみ報告する。

2. 検出遺構

調査によって確認された諸遺構については，付表に記したとおりである。

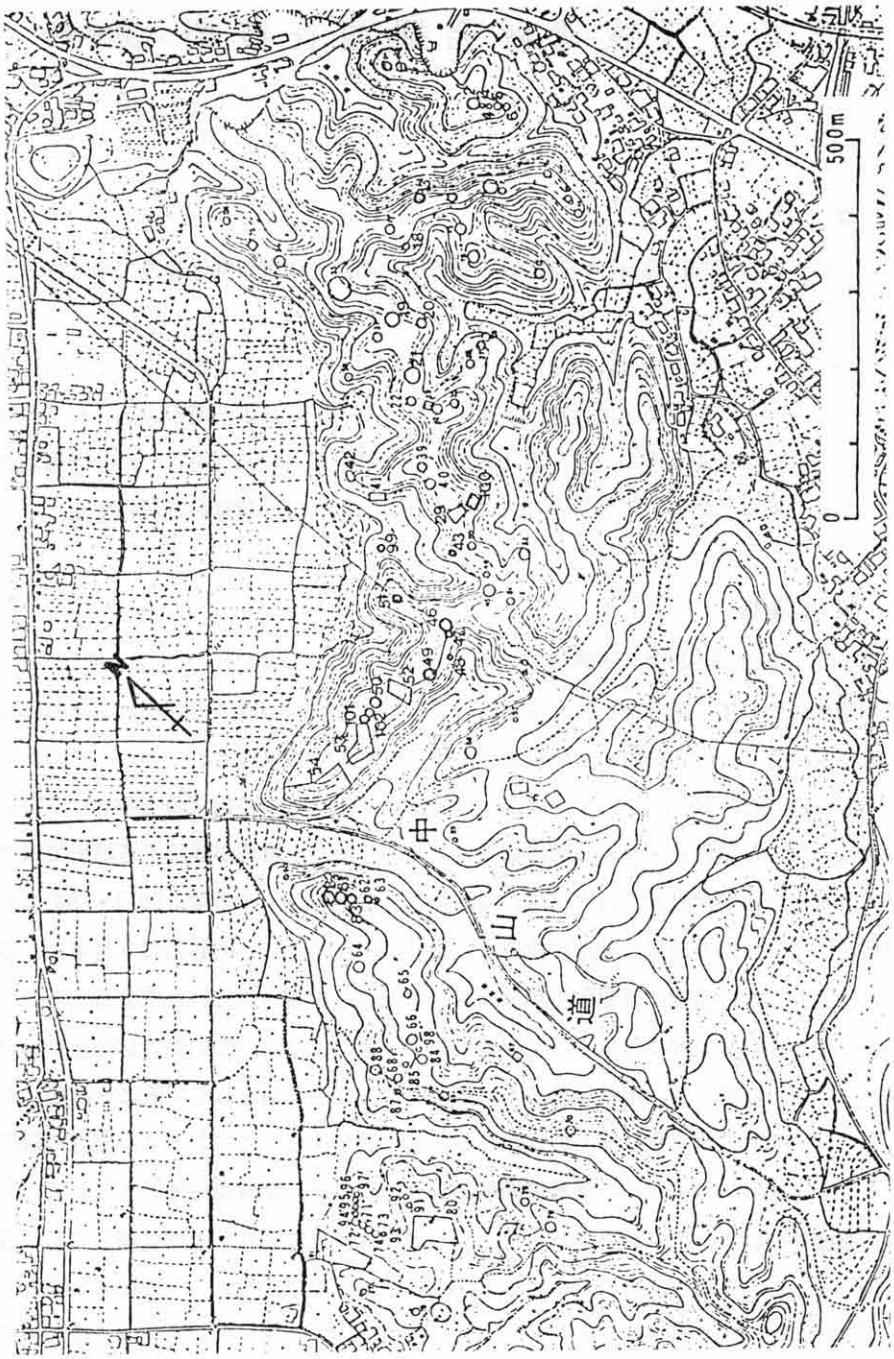
(1) 墳墓について　調査を行った墳墓は，いわゆる〝方形台状墓〟と呼ばれる墓制に属するもので，標高43～53mの狭小な尾根の自然地形を利用して築造されている。そのため大半が方形・長方形の墳形を呈し，一辺約11m前後，高さ1～2mの規模のものとなっている。

墳墓は，狭小な尾根筋・尾根頂部に構築されているため，墳墓が隣接する場所では墓域を区画するために溝が設けられている。（[4]・[5]谷尾谷3・4号墳，[61]・[83]論田2・12号墳）また，調査地最北東端に位置する[2]谷尾谷1号墳～[6]谷尾谷5号墳は，昭和55年度に調査した最南端に位置する墳墓同様，階段状に構築されていた部分もある。

調査地中央部[43]狸谷4号墳～[53]狸谷城跡第3地点までと，[99]狸谷16号墳にかけては，畑に開墾されており，尾根頂部から裾部に至るまで段々畑として明瞭にその痕跡を残していた。そのため墳墓らしきものは存在しても，原形をとどめておらず，調査の段階では墳墓と断定するには至らず，尾根筋面積が大きい割には，墳墓空白地帯となっている。

(2) 墓壙について　上記の墳墓からは，長方形状に掘り込まれた木棺直葬と思われる土壙墓を検出した。墓壙は，1墳墓単独主体と複数主体とに分けられ，その比率も半々である。形状は，二段墓壙・U字形素掘・_/字形素掘の3例を確認したが大半は二段墓壙であり，その最大のものは[51]狸谷城跡第1地点の6.4m×2.8mを測る。

これらの墓壙には木棺が埋納されていたと考えられるが，木棺痕跡が残されていないため，棺の構造等を明確にすることはできない。ただ，[2]谷尾谷1号墳・[42]狸谷3号墳・



第1図　豊　富　谷　丘　陵　遺　跡　分　布　図

調　査　結　果　一　覧　表

番号	名　称	墳丘		内部主体		外部施設	
		墳　形	規　模	主体部	出土遺物	遺構	遺　物
2	谷尾谷1号墳	円　形	直径 14m	木棺直葬	鏡(内行花文鏡) 鉄剣・鉇・鉄鏃(平根式)	—	—
3	谷尾谷2号墳	自然地形	—	—	—	—	—
4	谷尾谷3号墳	方　形	長辺 11.7m 短辺 11m	木棺直葬	鉄　鏃	溝	土師器(甕・壺)
5	谷尾谷4号墳	方　形	長辺 13m 短辺 12m	木棺直葬	土師器(壺)	溝	土師器(壺・高杯・器台) 須恵器(高杯・蓋・平瓶・高台付杯)
6	谷尾谷5号墳	方　形	長辺 11.5m 短辺 9.5m	木棺直葬 火葬墓	土師器(壺・器台・高杯) 骨細片多数	—	土師器(壺・甕・高杯・器台)
13	セイゴ1号墳	方　形	長辺 14m 短辺 10m	木棺直葬	—	—	スクレイパー(縄文時代)
18	セイゴ7号墳	自然地形	—	—	—	—	—
19	セイゴ8号墳	方　形	長辺 18m 短辺 12m	木棺直葬	—	—	—
20	セイゴ9号墳	方　形？	長辺 12m？ 短辺 12m？	売収用地外	—	—	—
21	セイゴ10号墳	方　形	長辺 18m 短辺 14m	木棺直葬	鉄器(鎌？)	—	—
29	セイゴ18号墳	方　形	長辺 12m 短辺 9m	木棺直葬	—	—	—
42	狸谷3号墳	方　形	長辺 12.7m 短辺 8.6m	木棺直葬	土師器(長頸壺・高杯・甕)	—	土師器(壺・高杯・器台)
43	狸谷4号墳	方　形	長辺 11.5m 短辺 9.7m	—	—	—	—
46	狸谷7号墳	方　形	長辺 15m 短辺 13m	—	—	—	—
47	狸谷8号墳	自然地形	—	—	—	—	—
48	狸谷9号墳	自然地形	—	—	—	—	—
49	狸谷10号墳	自然地形	—	—	—	—	—
50	狸谷11号墳	古墳か？	開墾のため墳形規模とも確認できない	—	—	—	—
51	狸谷城跡第1地点	方　形	長辺 10m 短辺 9.5m	木棺直葬	土師器片 土師器(高杯)	—	—
61	論田2号墳	方　形	長辺 11m 短辺 10m	木棺直葬	土師器(甕) 鉇	溝	土師器(台付壺・高杯) 磨製石斧
82	論田9号墳	方　形	長辺 10m 短辺 9m	木棺直葬	土師器片 土師器(器台)・鉄剣・鉄鏃	—	土師器(高杯)
83	論田10号墳	方　形	長辺 9m 短辺 8m	木棺直葬	—	溝	土師器(高杯) 磨製石斧
99	狸谷16号墳	方　形	一辺 9.5m	木棺直葬	鉄　剣	—	—
100	セイゴ22号墳	方　形	長辺 14m 短辺 11m	木棺直葬	—	—	打製石鏃(縄文時代) 高台付杯
101	狸谷17号墳	方　形	長辺 13.5m 短辺 10.5m	木棺直葬	土師器(高杯)・鏡	溝	土師器(甕・壺)
102	狸谷18号墳	方　形	長辺 9.3m 短辺 8.2m	木棺直葬	土師器(器台・高杯・甕・盌)	溝	土師器(甕) 管玉・鎌

[51]狸谷城跡第1地点・[100]セイゴ22号墳・[102]狸谷18号墳のように他の二段墓壙に比べ大きな二段墓壙に埋納されていた木棺は，断面がU字形を呈するため割竹形木棺が推定されるが，断定するには至っていない。ただ，[101]狸谷17号墳のように木棺周辺に薄い粘土を貼り付けていたという割竹形木棺の例もある。

これらの墓壙の形状や，遺物出土状況からすれば，被葬者の頭位は，おおむね東方向が中心であるといえる。狭小な尾根に構築された墳墓は，墓壙スペースの関係から尾根に平行・直交という形をとっているが尾根に直交・平行するどの墓壙の方向を確認した場合でも，北方向より東方向にかたよっている。

鏡を出土した[101]狸谷17号墳や，墓壙内に大量の土器を埋納していた[102]狸谷18号墳は，電車基地造成予定地内のほぼ中央部に位置しており，開墾により墳丘を削平されていたのにもかかわらず，遺存状態は大変良好であった。[101]狸谷17号墳では墓壙は3か所，[102]狸谷18号墳は1か所確認した。[101]狸谷17号墳の舶載鏡片（第2図10）が出土した墓壙は，3.8m×1.1mの⌊字形素掘りの墓壙で，土師器高杯脚部が共伴していた。一方完形の鏡（第2図9）が出土した墓壙は，4.6m×1.6mの二段墓壙で若干の土師器片が共伴した。[102]狸谷18号墳は，3.2m×1.9mの二段墓壙で，棺上に置いたと思われる古式土師器高杯・器台・盌などが出土している（第2図3～6）。両古墳は3条の溝によって区画されているが，[102]狸谷18号墳のすぐ東側に位置する[50]狸谷11号墳は，開墾による削平がいちじるしいためか，遺構等も検出されなかった。

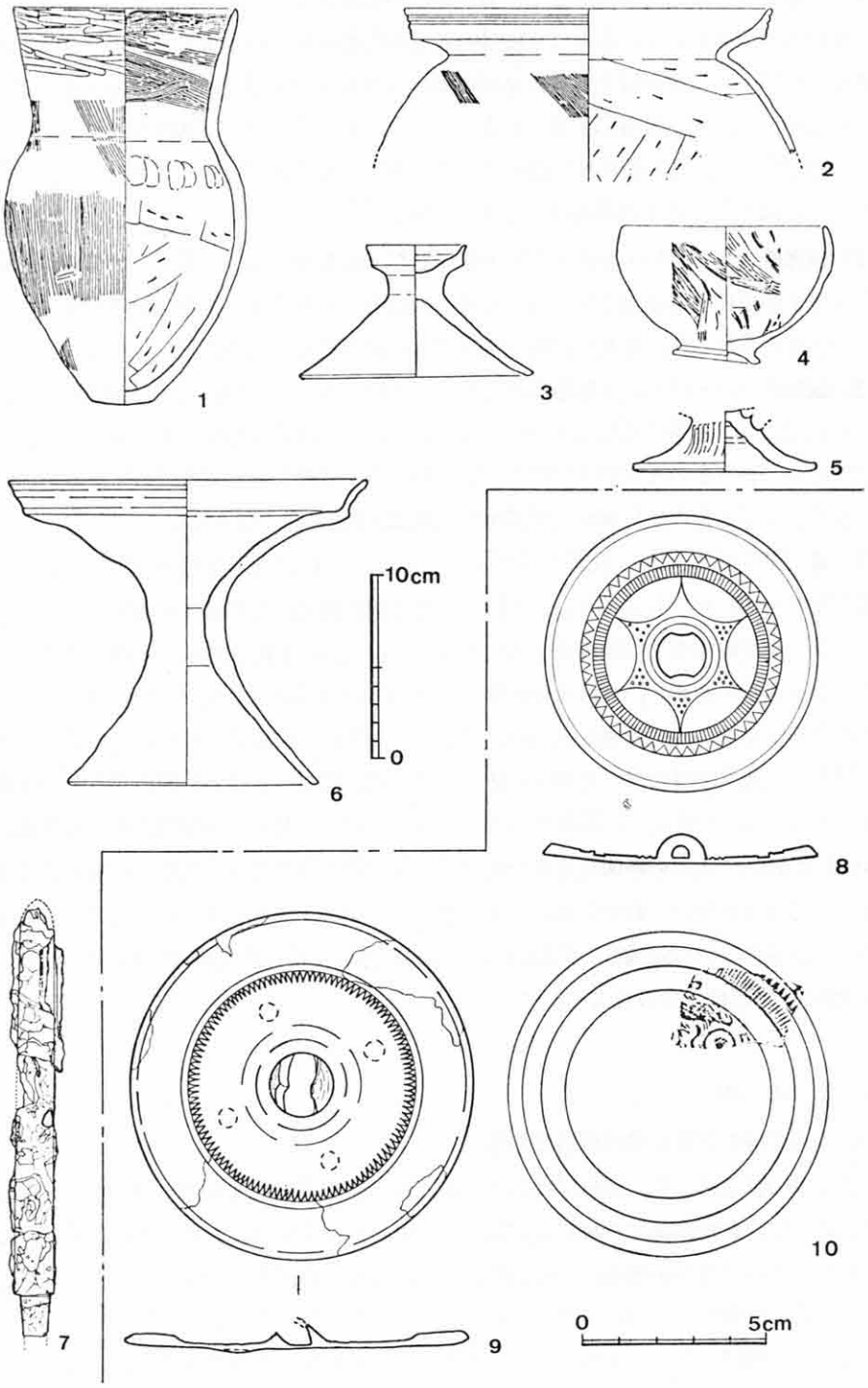
一方，仿製内行花文鏡（第2図8）が出土した[2]谷尾谷1号墳は，6.0m×3.0mの二段墓壙と，副室と考えられる1.4m×0.6mと1.7m×0.6mの2か所の土壙を検出した。墓壙はほぼ東西方向であり，この墓壙に平行に墓壙をはさむ形で検出された。墓壙の中からは，仿製内行花文鏡1面，鉄剣1振り（第2図7），北側副室からは鉇2本，鉄鏃（平根式）2本，南側副室からは鉄剣1振りが出土した。

また，[29]セイゴ18号墳は当初前方後円墳か前方後方墳ではないかと予想されたが，調査の結果，方形墳が2基近接して築造されていることが明らかとなった。

3. 出土遺物

出土した遺物は，古式土師器，須恵器，鉄製品，鏡，管玉等で，遺構内より出土したものが大半である。

(1) 古式土師器（第2図1～6）　器種は，高杯・器台・壺・甕・盌等がある。特徴として，二重口縁の器台・口縁部に擬凹線文や波状文・貼付竹管文を施した土器があげられる。外面は，ハケ目調整をした後，ヘラミガキを施す。内面は，ハケ目やヘラミガキ，ヘ



第2図 出 土 遺 物 実 測 図

ラケズリが見られる。土器の形態や，製作方法から見れば，在地系，山陰系，北陸系に分類できるようである。これらとは別に[101]，[102]狸谷17，18号墳より出土した土器は，タタキ技法によるタタキ目が器壁に存在するという畿内的要素の強い土器もある。また胎土的にも酷似した丸底壺も[2]谷尾谷1号墳より出土している。時期的な位置付けは，遺物の検討が進んでいない現段階では，詳細を明確にすることはできないが，これらの古式土師器は，畿内庄内式～布留式に併行するものと思われる。

(2) **須恵器**　高台付杯・杯蓋・平瓶・長頸壺などの器種がある。これらの遺物は[5]谷尾谷4号墳の墳丘上で確認したもので8世紀頃のものとみられ，火葬時の祭祀に用いられたものと考えられるが，散乱した出土状況であり確認するには至らなかった。

(3) **鉄製品**　剣・鏃・鉋・鎌等がある。剣は4振り出土したが，長さは30cm内外である。鏃は平根式に属するやや大型のものを2本確認した。鉋は直線的な縦断面を有す。鎌は大形品であり，碧玉製の管玉が1個付着していた。出土状況からして墓前祭に係るものと考えられる。管玉の長さは1.1cm，径0.3cmで中央に0.1cmの孔を穿っている。

(4) **鏡**（第2図8～10）　完形品2面・鏡片1面が出土した。[101]狸谷17号墳より2面（第2図9・10）出土しており，鏡片は，舶載の獣帯鏡で，完形品も舶載鏡と考えられ，ここでは「素文縁鋸歯文帯四乳鏡」と仮称する。前者は，半肉式のもので現存する部分に1乳，若干の獣形を残し，外区は複波鋸歯文帯からなっているようで，全体の6分の1弱の残存状態である。また銘帯があるが，銘字の中央で鏡が破断されているため判読できない。鏡片の長辺2辺は研磨しており，鈕をつるすために獣形と鈕との間に穿孔した痕跡が認められる。鋳上りが良く，現在でも光沢を放っている。復元径11cmである。後者は，径9.4cmをはかり，小形の鋸歯文帯が一周するのみで鋳上りが悪かったのか，内区には文様はまったくみられない。わずかに，若干の盛り上りをもった乳を4か所確認できるのみである。その他に，[2]谷尾谷1号墳から出土した仿製小型内行花文鏡（第2図8）がある。径7.5cmで，内区に6弁の花文を配す。

4. ま と め

以上が今年度の調査結果の概略である。

調査墳墓のほとんどが，畿内庄内式～布留式併行期に考えられる方形台状墓であるといえる。そして，鏡を副葬する墳墓と周辺の土器を副葬する墳墓，無遺物に近い墳墓とに分けられる。これら3つの特徴は，被葬者の身分の差を端的に表わしているものと思われる。すなわち，当地域には古墳時代前期に2つの大きな農業共同体の集団があり，その中にいくつかの構成集団があり，それが上記の結果を生み出しているのではないかと考えられる。

鏡片副葬は，北九州，瀬戸内海沿いに弥生時代を中心に見られる風習であり，文化の伝幡を考える上で大変興味深い。　　（増田孝彦＝当センター調査課調査員）

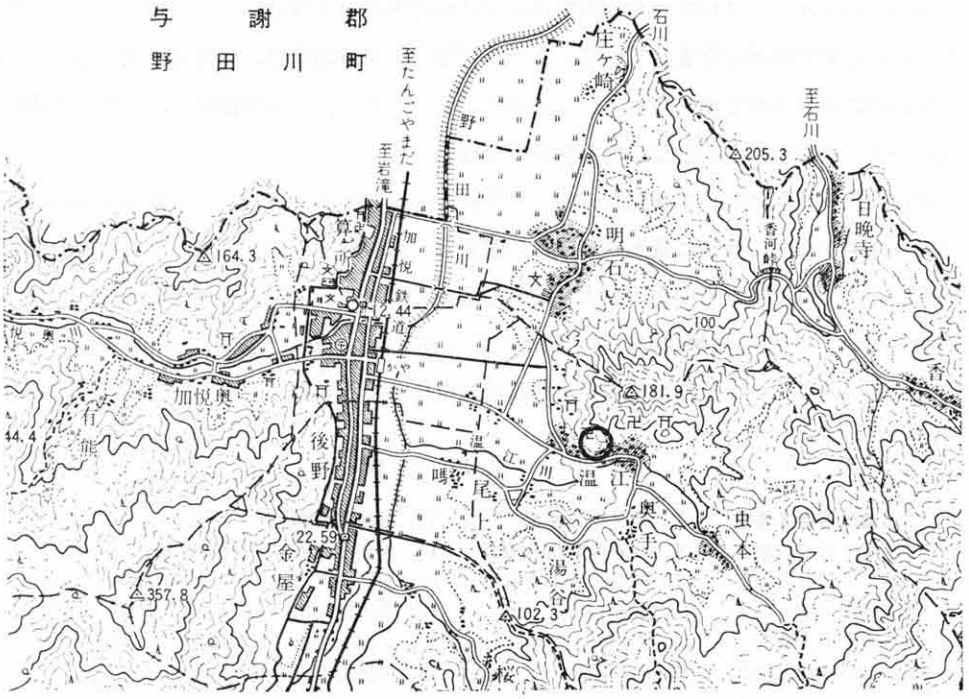
加悦町温江百合３号墳出土の埴輪棺 ＜図版３＞

佐　藤　晃　一

1. はじめに

ここに紹介する埴輪棺は，京都府与謝郡加悦町字温江（あつえ）小字百合（ゆり）に所在する温江百合３号墳において出土したものである。(注1) この埴輪棺は，昭和34年８月尾根道で発見されたもので，現在，加悦町教育委員会が保管し，加悦町立農村文化保存伝習センターで一般に公開展示されている。さて，この遺物については，既に何度か報告が行われているが，いずれも断片的なものであった。(注2) そこで，今回，改めて一通りの報告を行うものである。

なお，報告を行うにあたり，天理大学教授西谷真治氏，天理大学付属天理参考館置田雅昭氏，同志社大学考古学研究会ＯＢ田中彩太氏には，格別の御教示をいただいた。また，写真撮影には，京都府立丹後郷土資料館技師岡田晃治氏の協力を得た。併せて感謝申しのべたい。



第１図　位　　置　　図　(1/50,000)

2.　古墳の位置と出土状況

温江百合3号墳は，丹後半島の基部を南から北へ流れる野田川の支流温江川の流域にある。古墳の位置する野田川流域―通称加悦谷―は，南北10キロ，東西1～2キロのせまい河谷平野であるが，古墳は約600基あまりも存在するなど，特色ある地域である。その中で，本墳の立地する野田川中流東岸地区は，ことさら遺跡の密度の高い地帯である。さらに，温江百合3号墳の西約0.7キロには，丹後地方でも最大級の集落遺跡である温江遺跡[注3]が存在する。温江遺跡は，野田川が析出した低位段丘上に位置し，南北0.8キロ，東西1キロに広がっている。そして，古墳群は，この温江遺跡をかこむ丘陵尾根上に立地している。国史跡蛭子山（えびすやま），作り山両古墳群をはじめ，温江丸山古墳，鳴谷東1号墳など径60mクラスの大型古墳，温江大塚，七面山，後野円山古墳群等径30～40mクラスの中型古墳など，約70基の古墳が位置している。また，本墳に最も近い中型古墳として，尾根を一つへだてた北西約0.2キロに所在する小虫神社古墳（径30m），温江大塚古墳（径40m），温江小塚古墳（消滅）があげられる。この3基は，同一尾根上に位置しており，出土遺物など不明ながら，立地等より5世紀代に営まれたものと思われる。

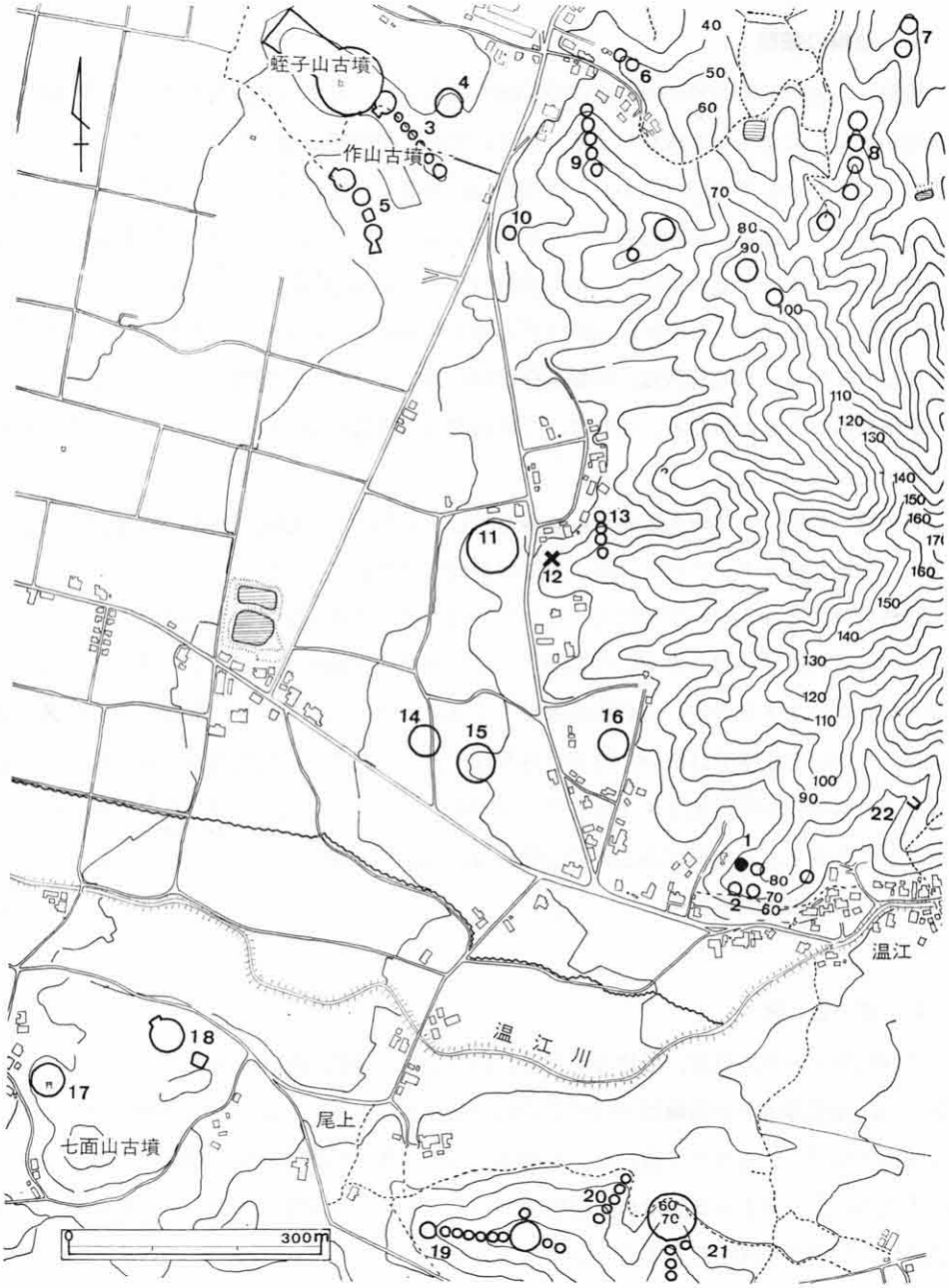
さて，温江百合古墳群は，丘陵の西，東斜面に3グループに分かれて築かれ，合計5基が遺存している。そのうち，西斜面に営まれたものが2グループ4基あり，百合3号墳は，その北側のグループに属す。その規模は，径10m前後の小さなもので，丘陵を削平して段を設け，その平坦面に営まれている。百合3号墳出土の埴輪棺は，その出土位置からして，古墳の中心をはずれて埋められていたようである[注4]。つまり，この埴輪棺は，古墳の埋葬施設の一部であるが，中心となる埋葬施設ではない。

次に，出土状況について検討したい。（図版3参照）写真によると，埴輪は土壙内にススカシ孔を上にして横位に置かれている。閉塞は，口縁部をやや小さめのカコウ岩2個で押さえ，底部はカコウ岩の平らな大きい石で押さえている。スカシ孔の閉塞については，定かでない。また，埴輪はひびさえ殆どなく完形であったが，遺物は何一つなかったといわれている。このような埴輪の使用法は埴輪棺に多くみられ，したがって温江百合3号

周辺の古墳一覧表

1．温江百合3号墳	7．芦ノヤ古墳群	13．谷垣古墳群	19．尾上古墳群
2．温江百合古墳群	8．明石愛宕山古墳群	14．温江小塚古墳	20．鴫谷西古墳群
3．蛭子山古墳群	9．明石大師山古墳群	15．温江大塚古墳	21．鴫谷東古墳群
4．藤野古墳	10．桑飼古墳	16．小虫神社古墳	22．こもり穴横穴
5．作り山古墳群	11．温江丸山古墳	17．七面山古墳	
6．日吉神社古墳群	12．谷垣遺跡	18．後野円山古墳群	

（番号は分布図と対応）



第2図 周 辺 の 古 墳 分 布 図

墳出土の埴輪は，埴輪棺とすることができよう。(注5)

3. 埴輪の観察

埴輪は，完形で器高91.6cm，底部径35cmをはかる。一見すると，大型の朝顔形埴輪の口縁部が欠失したような形状を呈する。従来，すべて朝顔形埴輪，あるいは円筒埴輪として扱われてきたものである。しかし，第6段（口縁部）の端部は明らかにヨコナデを施し，ここで終る。つまり，製作当初よりこの形状であったとみられる。次に，埴輪の断面が底部付近では円形であるのに対し，第5段では完全に長楕円形になっていることに注目したい。第2段上半あたりで円形から楕円形への変化が始まり，第4段の上半では完全に楕円形になっている。この特徴は，埴輪製作途中において，製作者が何らかの意図をもってした結果であると考えられる。これは，この埴輪の本質にかかわることであり，極めて重要な事柄である。

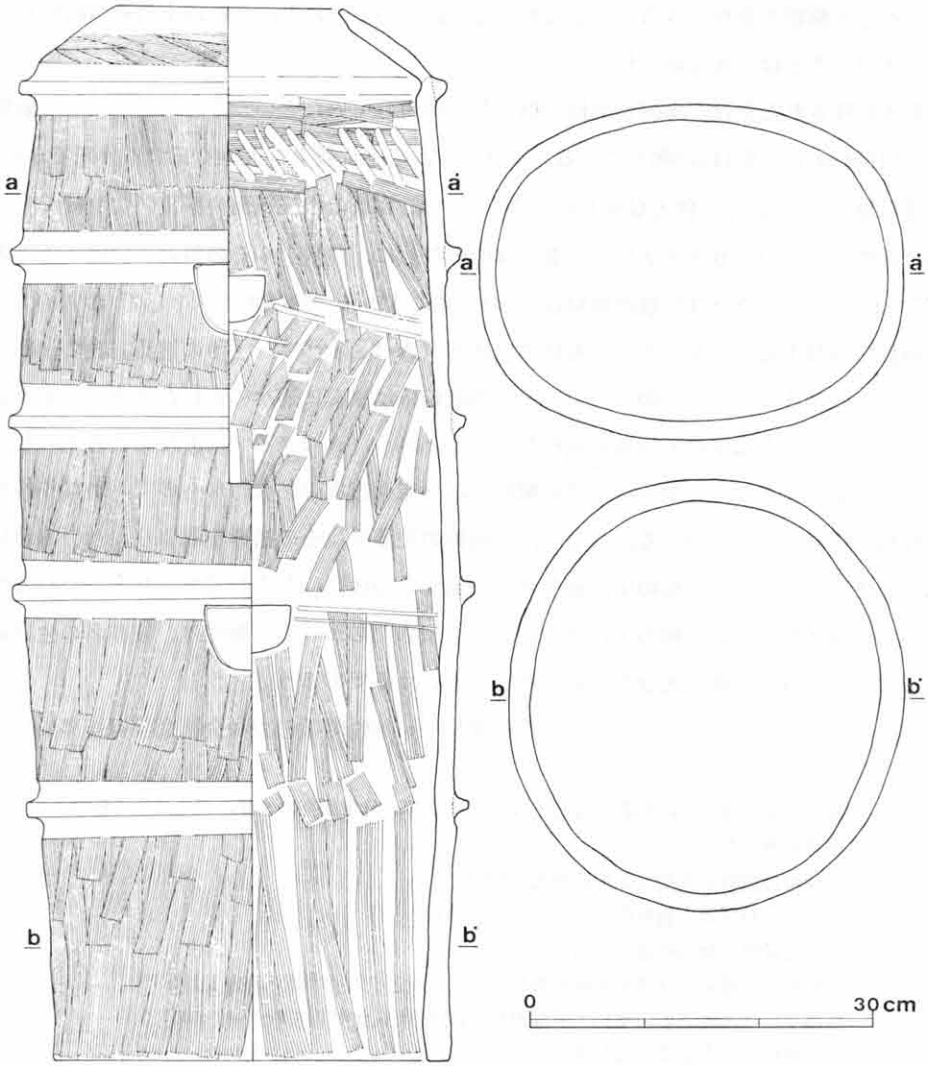
胎土は一般的で，2mm大の石英粒を多く含む。また，赤色小粒も含む。色調は黄褐色を呈し，堅緻に焼きあげられている。黒斑は相対する位置に上下に長くつく。

調整は，内外面ともハケメによっている。外面は，タテハケメを下から上へ施し，凸帯をつける。凸帯をつけたあと，凸帯間に新たにハケメを施すことはない。第6段外面は断続的なヨコハケメを行い，その後端部付近をヨコナデする。また，内面はタテハケメを施すが，外面ほど丁寧ではない。第6段内面はナデて仕上げる。凸帯は断面梯形状を呈する。スカシは半楕円形で(注6)，第2・4段に2つずつ穿つ。いずれも同一方向にあり(注7)，特に長楕円形を呈する胴部の長軸側にある。その位置は，段の最上部にかたよって穿たれ，凸帯にかかりそうなものもある。

4. ま と め

本例の有する問題点は，年代と形状である。まず，埴輪の年代からみていきたい。筆者は以前，加悦谷出土の埴輪について若干述べたことがある(注8)。その中で，埴輪が調整により4時期に分けられることを論じた。本例はその第一期にあたる。同時期のものとして蛭子山1号墳，作り山1・2号墳出土の埴輪がある。このような類例からして，本埴輪も4世紀末～5世紀の年代を与えることができよう。

次に問題になるのが，この埴輪が果たして何を意味するのか，である。これを解決する重要なポイントは，形状である。下半が円形で上半が楕円形ということから，単なる円筒及び朝顔形埴輪とすることはできない。また，第5・6段において変形が著しいということを考えると，むしろ第5・6段の変化した部分に意味があり，下半の円形の部分には大



第3図 百 合 3 号 墳 出 土 埴 輪 実 測 図

した意味はないと考えられまいか。

さて，平面形が楕円形をなすものとして，盒をあげることができる。現存する古墳時代の盒は，殆どすべてが古墳出土のものである。それらは碧玉製，滑石製が主で，それ以外に埴製，木製がある。これらの模造品は，曲物を模したものと考えられている。そのうち，古相を呈するものは平面円形で，新相をなすものは楕円形の平面といわれている。(注9) 京都府久津川車塚古墳(注10)，岡山県金蔵山古墳(注11)などから楕円形の盒が出土している。特に金蔵山古墳から出土した4個の埴製盒は，本例第5・6段と酷似するが，本例第6段中央が穿孔されている点が若干異なる。金蔵山古墳例では，蓋となっている部分である。この

差違をどう解釈するか。さらに形態はあくまで似ているものの，それ以上の積極的な相似点を求めることはできなかった。

最後に残された点は，本例が埴輪を棺として使用していたということだ。今日まで埴輪棺，円筒棺の出土例は170例をこえる。それらは，出土位置より大きく三つに分類できる。古墳の墳頂に位置し，主体となるもの（Aタイプ）。古墳の墳丘斜面や裾及び古墳にごく近い位置にあるもの[注12]（Bタイプ）。古墳とは関係なしに，丘陵上やその斜面に位置するもの（Cタイプ）。温江百合3号墳の埴輪は，このうちのAタイプに属する。そして，Aタイプも2種類に分類することができる。古墳の主体部（A-1タイプ），古墳の埋葬施設の一部しかないもの（A-2タイプ）の二つである。本埴輪棺はすでに述べておいたように，出土位置が古墳の中心をはずれている可能性があることから，A-2タイプにあたると考えられる。

以上，論じてきたことから，この埴輪棺は，小規模古墳の副次的なもので，かなり特殊な性格を帯びたものといえる。しかし，埴輪棺の被葬者はその棺の配置より，社会的地位は決して高くなく，当古墳の中心被葬者に従属する地位にいた人物であったと思われるが，かかる被葬者が何故，埴輪の中に永遠の世界を求めたのか。この解明は，被葬者の生前の職掌ともからみ，今後に大きな問題を残したといえるであろう。

（佐藤晃一＝加悦町教育委員会社会教育指導員）

注1　過去の報告等では，小森谷古墳となっているが，分布調査の結果，出土地点を確認し，名称も改めた。

注2　加悦町社会科研究会『かやの歴史』1964
京都府立丹後郷土資料館『丹後の古墳』1971
加悦町役場『加悦町誌』1974
杉原和雄「愛宕山9号墳発掘調査報告書」『加悦町文化財調査報告1』1975
佐藤晃一「加悦谷の古墳出土埴輪資料」『加悦町文化財調査報告4』1981

注3　弥生時代中期中頃よりはじまる。

注4　現地の分布調査を行った際，地元温江区の方々に案内していただき，出土地点を確認した。その地点には，土壙が地表観察でも明瞭に認められた。

注5　埴輪を棺に使用したものを「埴輪棺」，埴輪に似た特製の円筒を棺にしたものを「円筒棺」と，ここではしておく。

注6　これに類似したスカシ孔は，加悦町谷垣遺跡出土例をあげることができる。

注7　千鳥状の配置にはならない。

注8　佐藤晃一「加悦町の古墳出土埴輪資料」『加悦町文化財調査報告4』1981

注9　西谷真治「古墳出土の盒」『考古学雑誌』55-4　1970

注10　梅原末治『久津川古墳研究』1920

注11　西谷真治，鎌木義昌「金蔵山古墳」『倉敷考古館研究集報1』1959

注12　丹後地方では，このタイプに出土例がある。岩滝町法王寺古墳（前方後円墳全長84m）の墳丘外より埴輪棺が出土している。
堤圭三郎「法王寺・岩滝丸山両古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1970

古代エジプト遺跡を訪ねて(1)

小山雅人

I

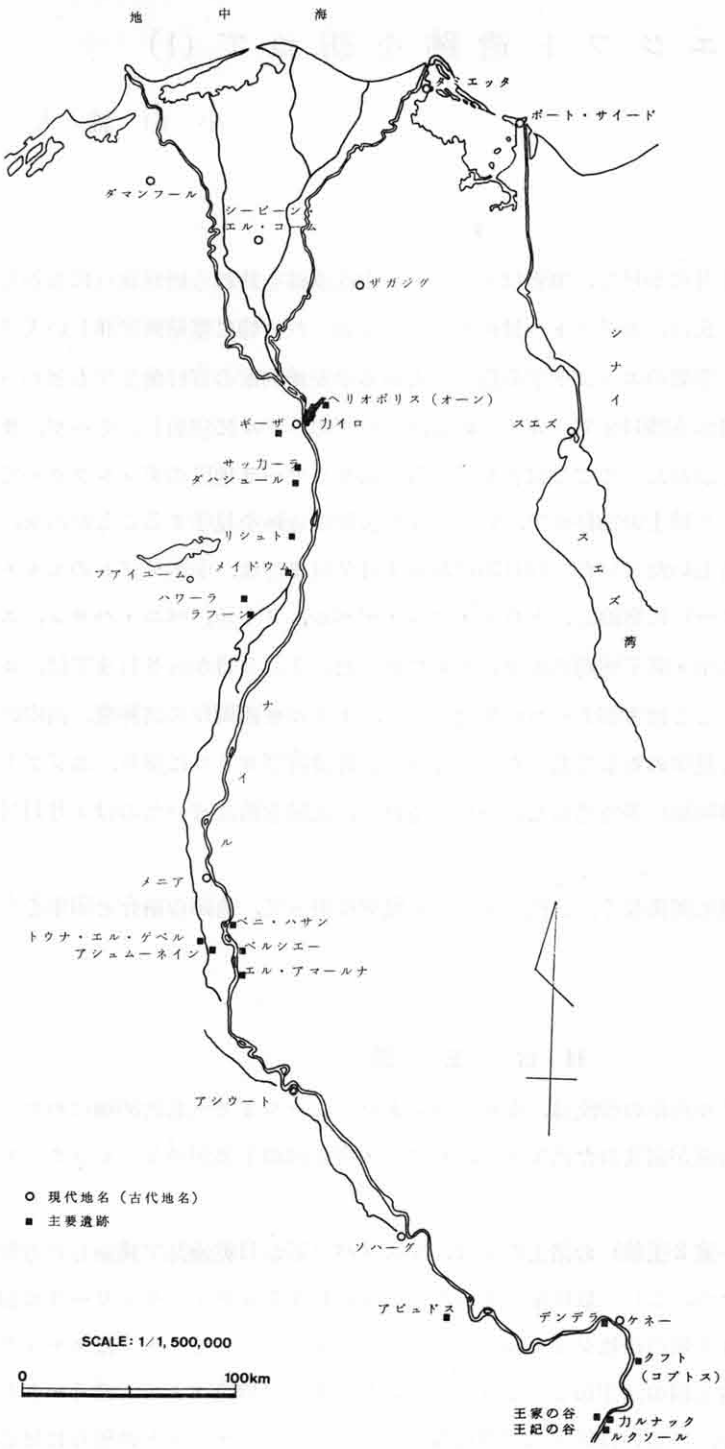
昨年末から今年の正月にかけて，筆者はエジプトの古代遺跡を訪ねる研修旅行に参加した。引率者の薄井憲二氏は，エジプトへは何度も行っておられ，特に墓壁画に詳しい人である。一行の中には，筆者のエジプト学の恩師でもある平安博物館の富村傳先生も加わっておられた。12月26日から29日まで，カイロの南西ギーザのホテルに宿泊し，ギーザ，サッカーラの古代墓地を訪ねた。ここではエジプト考古局サッカーラ地区のディレクターであるアハメッド・ムーサ博士の御好意で，いくつか非公開の遺跡を見学することが出来，墳墓中での撮影の許可もいただいた。12月30日から1月2日までは，中エジプトのエル・メニヤ（エル・ミニエー）に宿泊し，トウナ・エル・ゲベル，メイル，ベニ・ハサン，エル・アマールナの主に中・新王国時代の遺跡を見て回った。1月3日から8日までは，ルクソールに滞在した。ここは古都テーベの故地であり，ナイル東西両岸の諸神殿，西岸の王墓や貴族の墓が主な見学の対象であった。1月9日以降は再びカイロに戻り，エジプト博物館（通称カイロ博物館）等を訪ねた。全日程を終え，成田空港に着いたのは1月14日の夜であった。

本稿では旅行の日程に関係なく，古代エジプトの歴史に沿って，遺跡の紹介と印象を記してみたい。

II 古　王　国

カイロの西南，ナイル西岸の砂漠は，ギーザからダハシュールまで南北約30kmにわたって，古代王家や貴顕の墓が営まれた所であり，特に古・中王国の王墓が連なるピラミッド地帯でもある。

初期王朝期（第1～第2王朝）の諸王の墓は，マスタバ（石か日乾煉瓦で構築した方形台状墓）形式であったが，これを数段積み重ねた形の階段ピラミッドを，サッカーラに初めて営んだのが，第3王朝の始祖ジェセル（これは言わば諡号であって，本名はネチェリヒェト）王である。古王国の諸王のピラミッドは，言わば石造の墳丘部とでも言うべきもので，ピラミッド内部，あるいは地下に埋葬施設が営まれたが，ピラミッドの傍らには必ず葬祭殿があり，その他の多くは儀礼用の施設を含めた広い区域全てが王及びその家族の



第1図　エ ジ プ ト 地 図

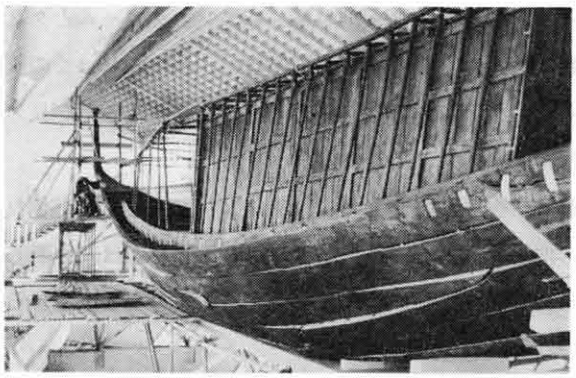
西暦	時代	王朝
	新石器文化	メリムデ文化
		ゲルゼー文化
3000 B.C.	初期王朝時代	第1王朝
		第2王朝
	古王国時代	第3王朝
		第4王朝
2500		第5王朝
		第6王朝
	第一中間期	7・8
		9
		10
2000	中王国時代	第11王朝
		第12王朝
	第二中間期	13・14
		15
		17
		16
1500	新王国時代	第18王朝
		第19王朝
		第20王朝
1000	末期王朝時代	第21王朝
		第22王朝
		23
		24
		第25王朝
		第26王朝
500		第27王朝（ペルシア）
		28 — 30
	グレコ・ローマ時代	マケドニア
		プトレマイオス王朝
西暦紀元		ローマ帝国領

年　表

墓所なのである。われわれ一行はムーサ博士の案内で，階段ピラミッドの第2主体部とも言える周壁南辺地下28mに営まれた埋葬施設を見学することが出来た。半ば砂に埋もれた鉄扉を開き，長いトンネルを中腰で，懐中電灯のみを頼りに下りて行くと，高さ幅共1.6mの細長い通廊に至る。壁面のいくつかには青色釉のタイルで覆われ，3か所に壁龕があり，儀式中の王の姿が浅い浮彫りで表わされ，上辺と左右辺に王名が刻まれている。この第2の埋葬施設は空墓で，ピラミッドの地下の第1のそれとほぼ同じであるがやや規模が小さい。王名を刻んだヒエログリフは，初期王朝期の古拙さを払拭した最古の古典的字体である。エジプト文字には，別にヒエラティックと呼ばれる筆記体があるが，ヒエログリフの方は，その後3000年間殆ど形の変化なく使用されることになるのである。

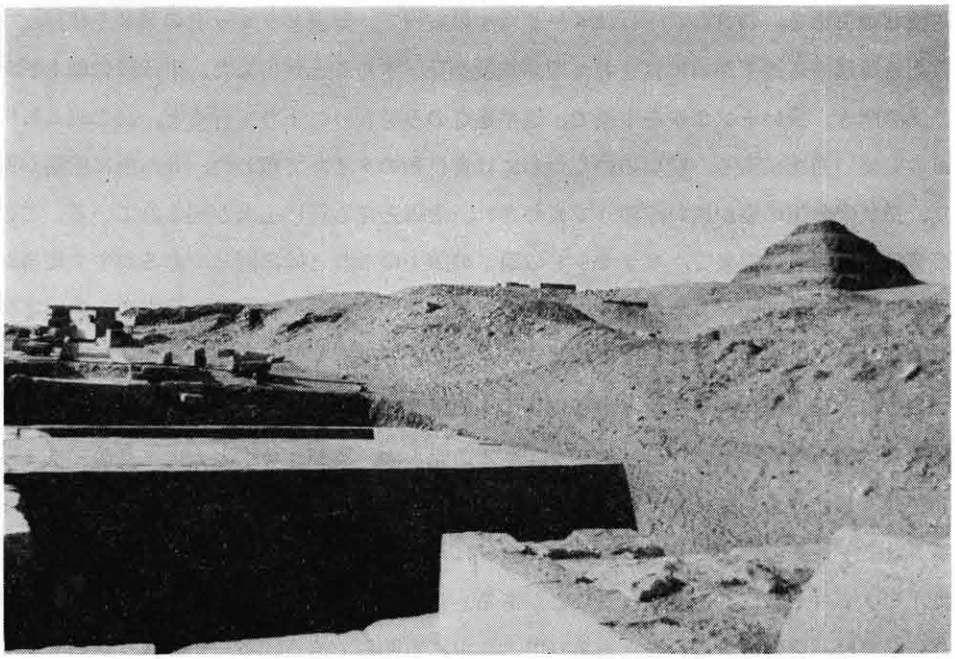
第4王朝の祖スノフルウは，タハシュールの北と南，及びメイドゥムに三基のピラミッドを建造している。そして，跡を継いだクウフ，カァフレーエ，メンカウレーエのピラミッドは，ギーザの三大ピラミッドとして余りにも有名である。古王国（第3～第6王朝）は「ピラミッド時代」と呼ばれることがある。第4王朝はその全盛期と言えるのであるが，その歴史は，史料の少ないこともあって，非常に不明確である。ギーザのクウフのピラミッドは，巨大である。写真や映像で何度も見ており，高さ137m，底辺一辺長230mという数字は知っていても，その巨大さは目の前にして初めて納得できるものであった。このクウフ王のピラミッドの周辺には，王の死後の祭祀に従事していた神官貴族たちのマスタバが点在する。われわれが見学したのは，ちょうど考古局の職員が壁画の実測をしていた古王国時代の2基であったが，クウフ王の祭祀は，没後20世紀を経たある記録にも見えている。生前は地上に於ける神の役割を果したファラオは，死後真の神になったのである。

1954年5月，クウフ王のピラミッドの南で発見された2か所の大土壙の中から，解体された巨大な木造船が出土した。部品は余りに大きく，縮少した部品を作り，この縮尺模型の接合と同時に復原が進められたのであるが，われわれが考古局の御好意で未公開の展示館を見学した時は，模型は完成しており，実物の方も最後の仕上げが行われていた(第2図)。全長40mの船は，完形であり，太陽神レーエの乗る聖船の形態をしている。木材は99%以上レバノン杉である。



第2図　クウフ王の聖船

ジェセル王の階段ピラミッドの



第3図　ウニス王墓参道と復原されたマスタバ（右は階段ピラミッド，東から）

すぐ南西隣りにある第5王朝最後のウニス王のピラミッドは，王の死後の葬祭に関する呪文集「ピラミッド・テキスト」の初現として著名であるが，ここではその参道の発掘と復原について紹介してみたい。ウニス王のピラミッドに付属する上神殿とその西方，ナイルの岸辺にあった下神殿（河岸神殿）を結ぶ施設が参道である。復原された参道は石材の両壁と天井を有する道である。その発掘調査と復原工事を担当したのが先述のムーサ博士である。参道はほぼ一直線に河岸に向かって発掘されて行ったが，途中で石材に浮彫りのあるものが夥しく発見された。参道の発掘は一時中断され，浮彫りのある石材の調査が行われた。検討の結果，これらはウニス王墓の参道建造に際して取り壊された貴族のマスタバ墳墓の石材が転用されたものと判明した。現在，ネフェルの墓，ニアンククヌームとクヌムホトペの墓の2基が見事に復原されているが，公開はされていない。われわれはこの両マスタバを見ることが出来たのであるが，壁面には非常に保存の良い浮彫りや壁画が見られる。参道の石材に転用されたのが反って幸いであったかのようである。

現在，エジプトに於ける発掘は，修理・復原を目的としている。天井が落ち，柱が倒れた神殿の復原，現存神殿の解体修理，埋もれた墓の掃掘等である。ムーサ博士は，中断したウニス王墓参道と復原されたマスタバ（第3図）を指差しながら，「どちらも復原することは出来ませんからね」と，苦笑いされていた。

（小山雅人＝当センター調査課調査員）

昭和56年度発掘調査略報

17. 前 椚 2 号 墳 <図版4>

所 在 地　相楽郡加茂町大字尻枝小字前椚55-4，他

調査期間　昭和56年12月7日～昭和57年2月23日

調査面積　250㎡

はじめに　ここに紹介する前椚2号墳の調査は，一般道木津～大柳生線の拡幅工事に伴う事前調査の略報である。

相楽郡加茂町では古墳の発掘調査はほとんど行われておらず，恭仁宮の発掘調査によって，削平されてしまった古墳が発見された程度である。当地は奈良山をはさんで大和地方と接し，740年～743年の4年間は，聖武天皇によって都（恭仁宮）の営まれた地でもあり，古くから大和地方との関係をもち続けたと考えられる。

今回の調査は，6世紀から7世紀（古墳時代～歴史時代）にかけての当地と大和政権の関係を知る上で，新たな資料を得たといえる。

調査概要　前椚古墳群は，横穴式石室をもつ直径15～19mの円墳（消滅古墳など規模不明のものもある）5基から構成された古墳時代後期の群集墳である。現在3基が地表にその姿を留めているが，中でも今回調査した2号墳は，外部施設・内部施設ともに保存状態がよく，その構造をよく残していることが明らかになった。このため当古墳は保存されるべく工事の設計変更が行われ，保存のための処置がとられた。以下調査の概要について簡単に述べ，遺跡の紹介としたい。

第1図　調査地位置図（1/50,000）

墳丘及び外部施設　墳丘は直径19mの円墳で，外護列石は4段以上積まれていたと考えられる。また列石の中には，約40°毎に周囲の列石より大きい人頭大の石を縦に積み上げた箇所があり，古墳築造時，列石を配す基準となったものと考えられる。

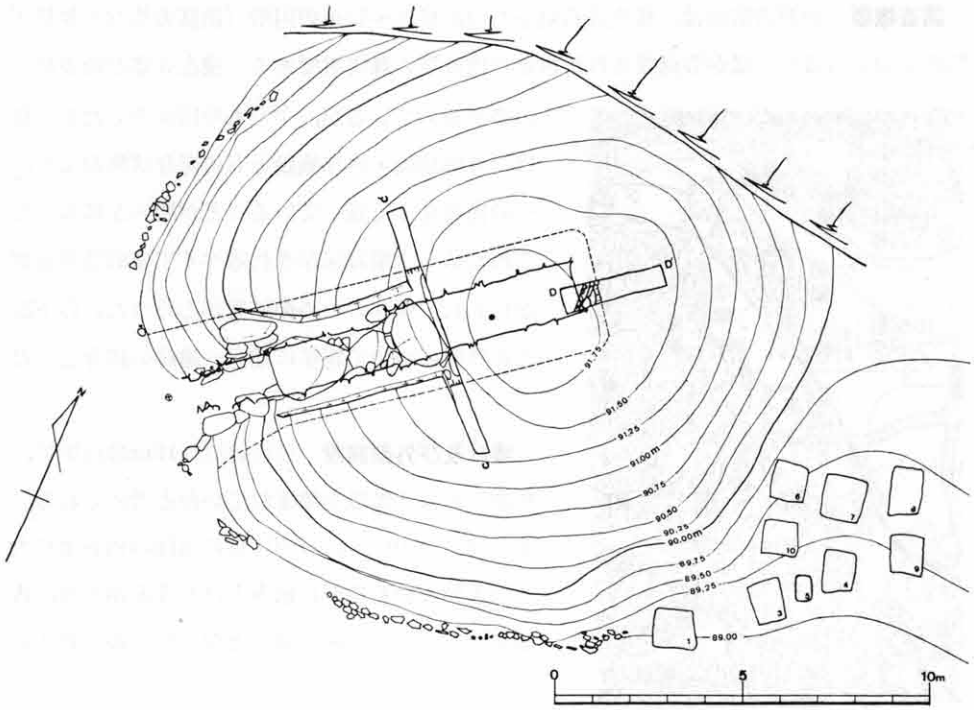
内部施設及び埋葬施設　石室は片袖の横穴式で，

側壁は持ち送り式である。天井石は玄室で4枚，羨道部で2枚残っており，もう1枚が石室西側に移動した状態で残っている。その規模は，羨道部では天井部で幅約0.7m，床面で1.1m，高さ1.9m，羨道長（羨門から閉塞石まで）3.0mを測る。また，玄門部の天井は一段低くなり，床面との高さ1.4mを測る。玄室はわずかに袖を持ち，天井部で幅約1.0m，床面で1.3m，玄室長5.0mを測る。側壁は，羨道部閉塞石からさらに開口部に向って伸び，広がりながら外護列石へと連なる。

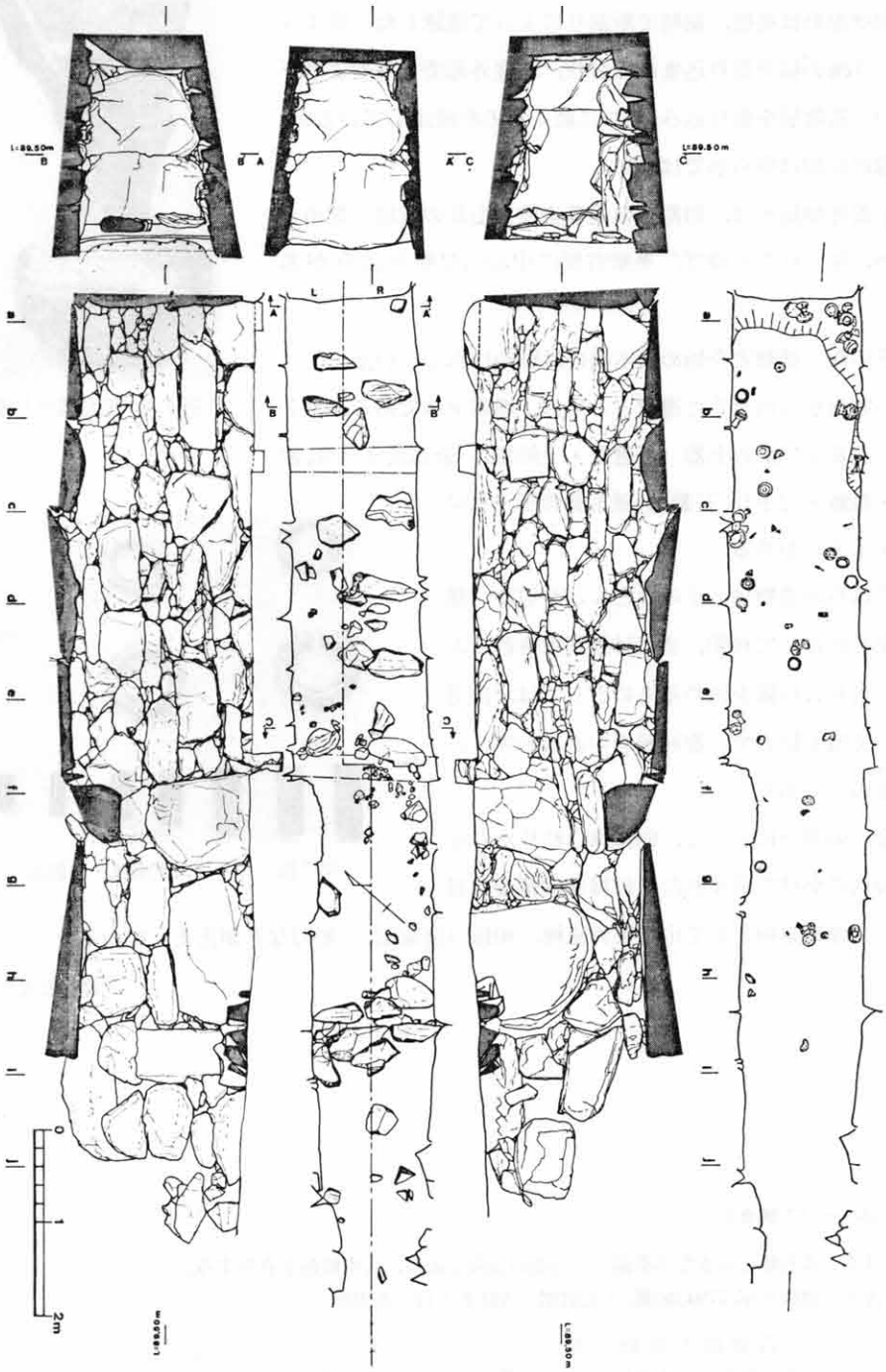
石室内からは石床，棺台，閉塞石の施設と側壁掘形，土器埋納掘形の二種類の掘形を検出している。石床は，径3cm余りの河原石を粘土敷面の上に敷き並べたものであるが，幾層もの追葬による掻き出しによってそのほとんどが失われ，玄室入口付近にわずかに現位置を留めたものがある。

棺台は，木棺を安置するための石の施設である。玄室内に合計10個の棺台が残り，玄室の軸に並行して，二列の木棺が次々と追葬された様子をうかがうことができる。これら棺台のレベル，副葬遺物を合わせて考えると，合計7体の埋納が行われたと考えられる。

閉塞石は，玄門部から開口部へ約3mのところで検出した施設で，幅約10cmの空間を作って二列の石を並べ，追葬の終了した段階で石室に封をしたものである。構造からみて，



第2図　前　椚　2　号　墳　及　び　中　世　墳　墓　群



第3図 石　室　実　測　図

扉には木製の板が使用されたと推察される。

側壁掘形は奥壁，側壁で断割りによって確認した。壁より3～5cmの幅で掘り込まれており，石室外部で天井石より下部から基盤層を掘り込み，これに続くものを確認しているが，全体の様相は明らかではない。

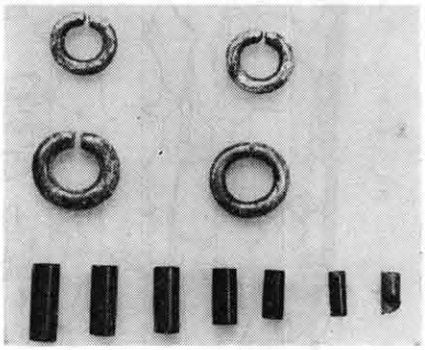
土器埋納掘形は，初期葬の副葬遺物を追葬の段階で埋めるために掘られたもので，奥壁右側に中心的な掘り込みがある。

その他，被葬者を納めた木棺の痕跡を検出している。

第4図　2号墳出土瓌

石室内から出土した遺物としては，埋葬主体である人骨3体，副葬品である土器（須恵器・土師器），金属製品（金，銀環・鉄鏃・刀子），石製品（硬玉製管玉・水晶製切子玉）がある。

これらの遺物は，そのほとんどが追葬，掻き出しによって移動，または再利用されており，当初の位置を留めるものとしては，羨道部の提瓶を除いて，蓋杯類を中心にわずかにあるのみである。



第5図　2号墳出土金属・石製品

今回の調査によって，他に鎌倉時代から室町時代にかけて営まれた中世墳墓10基を発見した。埋納遺物として中国製青磁椀，和鏡（蓬萊鏡），短刀などが出土している。

（戸原 和人）

（53ページの続き）

注1　本丘陵と小さな谷を隔てた北側の丘陵上には，大内城跡が立地する。
注2　寛政6年(1794)編纂。「天田郡」古跡大内村の条参照。

古墳出土遺物一覧

第1主体部　須恵器杯身(3)　杯蓋(3)　台付短頸壺(1)　蓋(1)　瓌(1)　鉄鏃(9以上)
鉄斧(1)　鉄鎌(1)　鉄刀子(3以上)
第2主体部　須恵器杯身(2)　杯蓋(1)　土師器把手付鉢(1)

18. 宮ノ平遺跡 <図版5>

所 在 地 城陽市寺田字宮ノ平

調査期間 昭和57年1月21日～3月31日

調査面積 約2,300㎡

はじめに 今回，調査の対象となった宮ノ平遺跡は，京都府住宅供給公社による宅地開発が計画されたため，昭和55年，試掘調査が行われ，古墳時代～平安時代の遺構・遺物が検出され，遺跡であることが確認された。その後，開発がより具体化したため，試掘調査の成果を受け，今回，本調査を行った。

遺跡は京都府南部の宇治丘陵から西へ派生した標高55～56mの丘陵上に立地している。周辺は久津川古墳群に代表される，京都南部でも有数の古墳密集地であるとともに，他に集落，寺院等の調査例も多い。調査地に近接する遺跡としては，同丘陵端にかって存在した宮ノ平古墳群や，南側の丘陵上で住居跡や方形周溝墓を検出した芝山遺跡などが知られている。

調査概要 調査は試掘の際，遺構・遺物が検出された丘陵稜線上の平坦面，二か所を掘削した。その結果，確認できた遺構は古墳，埴輪棺，土壙墓，住居跡，井戸跡等である。

古墳は2基検出したが，かって調査された宮ノ平古墳群（1～3号墳）とのつながりを考え，東側から宮ノ平4，5号墳とした。4号墳は一辺約15mの方墳で幅2.5mの周溝を有する。墳丘はすでに削平され，主体部は検出できなかったが，周溝内より埴輪，土師器，

第1図 調 査 地 位 置 図 (1/25,000)

須恵器片が出土した。5号墳は一辺10.5mで幅1.2m～1.5mの溝がめぐる。中央部からやや南に偏した所で土壙を検出したが，この5号墳に伴うものかどうかは明確ではない。中から石鏃が出土している。周溝内からは須恵器，鉄器片が出土した。東側周溝内からは須恵器の鐙，杯蓋，壺，甕が並べられた形で出土した。なお，この5号墳に関しては，主体部は明確でないが形状，あるいは芝山遺跡との関連等から方形周溝墓として把握し得る可能性も残している。時期は4，5号墳ともに5世紀後半のものである。

埴輪棺は比較的小型の円筒埴輪を主としその周囲に朝顔形埴輪3個体分の朝顔部で蓋，あるいは補強をしている。

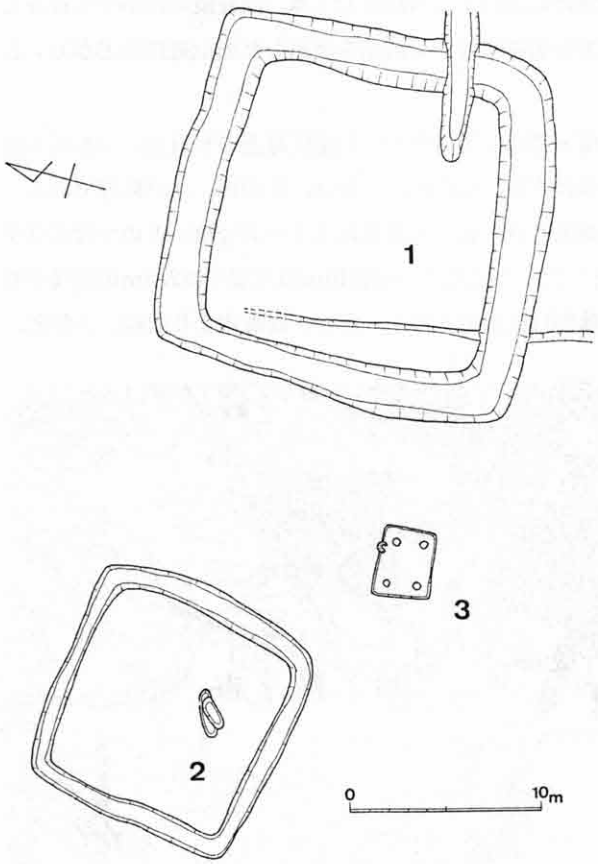
他の墓壙としては，試掘調査時に確認された，古墳時代，平安時代のものの他に数基が確認されている。今回調査のものは全て遺物を伴わず，時期決定が困難な面もあるが，周囲との関連，あるいは形状等から，やはり古墳～平安時代に概当するものと考えられる。

住居跡は2基検出した。一辺3～4mの方形で北側の辺にカマドが造られている。出土した遺物から見て，7世紀のものである。

井戸は深さ約1.6mを計るが，湧水は考えられず，雨水等を溜め，使用したものと思われる。時期は不明である。

まとめ　調査の結果，削平を受けているとはいえ，古墳二基を検出し，宮ノ平古墳群を考える上で貴重な資料となるとともに，それがこの地方で最古式に属する須恵器を共伴した点も見逃せない。また点々と検出した墓壙は，古墳との関連で，あるいは時代の変遷の中で各種の様相を示し，二基とはいえ住居跡も，当地方の丘陵部に点在する集落に一資料を追加したものといえる。

（長谷川　達）



第2図　遺　　構　　図（部分）
1. 宮ノ平4号墳　2. 宮ノ平5号墳　3. 住居跡

19. 広 隆 寺 跡 <図版6>

所 在 地 京都市右京区太秦蜂岡町31

調査期間 昭和56年7月13日～8月20日，昭和57年1月12日～3月12日

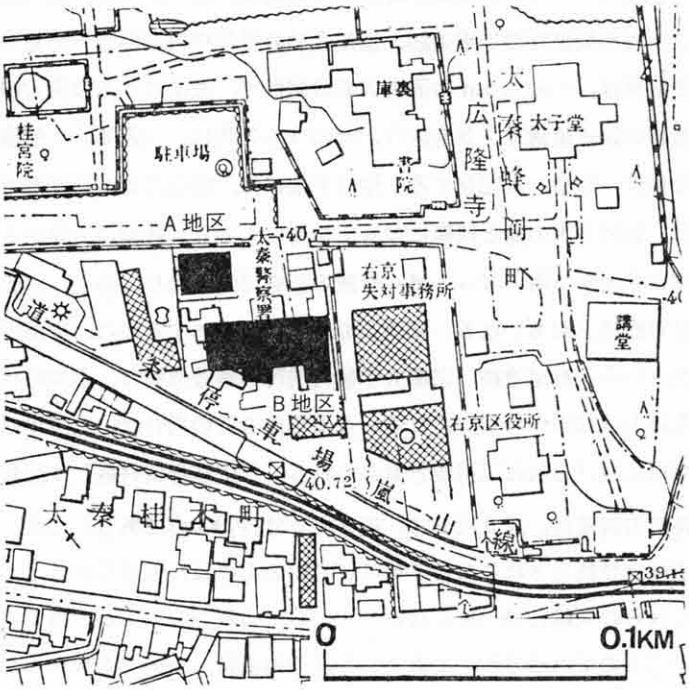
調査面積 約850㎡

はじめに 今回の発掘調査は，太秦警察署の老朽庁舎の撤去改築工事が計画されたことから，その事前調査として実施されたものである。調査対象地は，広隆寺楼門と講堂の中軸線から約100m～150m西方で，東は右京区役所に，南は三条通に接する。

広隆寺は，「蜂岡寺」，「葛野寺」，「秦寺」ともいわれ，『日本書紀』の記載によれば，推古天皇11年（603）に建立されたという。

今回，昭和56年7月13日から8月20日の期間に1回目A地区の調査を，庁舎撤去後の翌年，1月12日から3月12日の期間に2回目B地区の調査を行った。

調査概要 A地区の調査では，地山面とおもわれる黄褐色土，砂礫層に掘り込まれた溝，石敷土壙，狭長な土壙及び大小の円形土壙が7か所検出された。溝は，トレンチ西端で検出した。弧を描くように湾曲する溝で最大幅が2.2m，狭いところで0.9m，深さは30～40cmある。長さ5mにわたって検出したが壁面に延長部分がないため，途中で止切れるものとおもわれる。瓦，須恵器，土師器，黒色土器，炭を含む。出土遺物から，平安時代前期のものと思われる。石敷土壙は，溝を切り込んだ円形で直径1.3m，深さ0.2mである。底には小石を敷き，側面には瓦と10cm前後の石を貼り



調 査 地 位 置 図

付けた状態で置く。底と側面の境に軒丸瓦が，底に敷かれた小石の間に硯として使用された平石が置かれていた。遺物は，小破片がわずかに含まれる。東西に長い土壙は，長さ4.5m，最大幅1.7m，深さ35cmをはかる。多量の石と共に，瓦，須恵器，土師器，緑釉陶器，灰釉陶器，土馬が含まれる。出土遺物から，平安前期と思われる。

B地区は，警察署旧庁舎，道場，車庫をはじめ，昭和3年2月7日に火災にあった記録の残る旧太秦小学校の校舎等の建物基礎や溝による攪乱が著しい。トレンチ西部において改葬骨を納めた甕が3基発見された。その他ピットや小土壙が検出されたが，それらの関連は不明である。トレンチ中央部南端で，土器だまりが，東南隅で溝が検出されたので，延長部分の確認のため拡張した。その結果，土器だまりの下層で，飛鳥時代の軒丸瓦を含む瓦だまりが発見された。また，溝の南隣りで，一辺が2.7mの隅丸方形のプランで，深さ1.2mの土壙が発見された。埋土には，灰や炭，焼壁，銅滓，瓦，粘土が含まれており，掘り下げたところ，中央に梵鐘を鋳造した鋳型（砂型）が残っていた。鋳型は，礫層の上に炭を含む土で土台を作り，その上に砂質土を敷くものである。この砂質土が梵鐘の下端（駒の爪）を示すものとおもわれる。鋳型の内型側，内型の粘土との境界が赤黒く焼け焦げている。これによれば，内径118cmをはかる。鋳型の両側に各々2か所のピットがあり，径20～30cm，深さ10～20cmをはかる。

上述したような，梵鐘を鋳造した遺構は，他では，大津市滋賀里町の長尾遺跡，長野県上伊那郡飯島町の寺平遺跡，京都大学教養部構内遺跡等で発見されている。長尾遺跡の鋳造遺構は，一辺3.0mの隅丸方形の掘形で，底面に3本の溝と四隅にピットを持つ。寺平遺跡の鋳造遺構は，3基あり，そのうち2基は，一辺2.5m前後の隅丸方形の掘形で，底に鋳型（砂型）が完存する。他の1基には，底面に3本の溝がある。京都大学構内のものは，底に2本の溝と四隅にピットを持つものと，鋳型の完存するものがある。これらの遺構に共通する溝・ピットは，梵鐘の型を固定したり，鋳上った後，梵鐘をつり上げる構架材の痕跡とおもわれる。戦前まで，梵鐘を鋳造するのに，寺院内等で作業を行う事があったという。長尾遺跡，京都大学構内遺跡の鋳造遺構は，平安時代前期のもので，広隆寺のものもほぼ同一時期にあたる。この鋳造遺構の場合は，広隆寺旧境内の可能性が高く，寺院内に設けられた工房跡とおもわれる。『広隆寺資材帳』に記載のある，承和9年(842)鋳造の銅鐘は，周9尺6寸，径3尺2寸(約96cm)である。また，西本願寺飛雲閣が蔵する広隆寺梵鐘とされる久安6年(1150)銘のものは，幅2尺2寸である。今回，発見のものはこれらの梵鐘とは一致しないことから，広隆寺の工人が，他の寺院の梵鐘を鋳造したことを示すのであろうか。このような鋳造遺構は，全国でも数例しか知られておらず，貴重な資料を得ることができた。

（石尾 政信）

20. 法成寺跡

所在地　京都市上京区広小路通寺町東入中御霊町

調査期間　昭和57年3月23日～4月28日

調査面積　360㎡

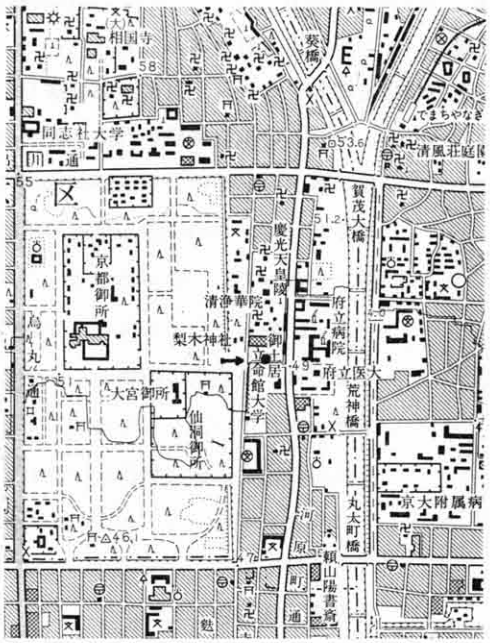
はじめに　この調査は京都府立医科大学が旧立命館大学跡地に新たな病棟等を建設することが計画されたため，事前に行った発掘調査である。建設予定地は広範にわたるが，その大半はかって建っていた立命館大学学舎の基礎及び地下施設があり，遺構等の存在は望めない状態であることから，今年度はそれら既設建物の間を一部調査したものである。

調査地は平安京域外ではあるが，東京極大路に東接する位置であり，また寛仁4年(1020) 藤原道長によって建立された法成寺の寺域に入る可能性が高い場所でもあった。

調査概要　調査は東西に長く断続的にトレンチを入れ，約360㎡を掘削した。土層は東半では約1mの置土の後，30～50cmの暗褐色土があり，それからは遺物を全く含まない砂礫層が続く。西側では地表下30～50cmで焼土層が現われ，それ以下，薄い暗褐色土層を経て，東側と同様な砂礫層となる。

検出した遺構は江戸時代後期以降と考えられる，墓，井戸，石垣，建物礎石がある。墓には土葬墓と火葬墓があるが，形態は様々である。近代の整地によって，上部施設は全て破壊されていたが，地下施設は遺存していた。土葬墓の中の四基は花崗岩の板石で石槨を造り，中に銅板を貼った木棺を入れていた。また，他に鎧を着たまま葬られたものも一基あった。火葬墓には甕・壺・ガラスなどの各種の容器が蔵骨器として用いられていた。出土遺物は近世の陶磁器類，瓦，土師器が大半であるが，少量の平安時代とも考えられる瓦，土器が出土している。

このように，遺構，遺物とも近世以降のものが主体となり，法成寺と直接の結びつきを示すものは確認できなかった。



調査地位置図 (1/25,000)

(長谷川　達)

21.　長岡京跡右京第83次（7 ANINC 地区）

所 在 地　長岡京市今里西ノ口，蓮ケ池，藤ノ木，他

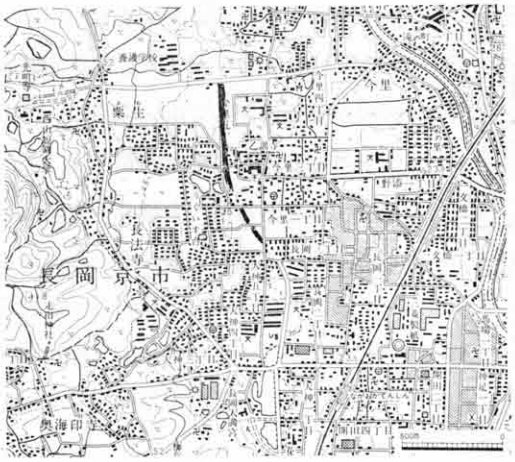
調査期間　昭和56年10月26日～昭和57年3月29日

調査面積　約2,500㎡

はじめに　今回の調査は，都市計画街路石見（いわみ）・淀線の建設工事に伴い，当該地が長岡京跡の一部に当っているところから，実施したものである。調査地は，長岡京跡の三条三坊・四条三坊に相当し，また北方には井ノ内遺跡が，東方には白鳳時代（奈良時代前期）の古瓦を出土する乙訓寺がある。さらに，今回調査地の東方の外環状線の調査では，弥生時代から古墳時代そして平安時代の集落跡が検出されている。

調査概要　調査対象地にA～Kの計11のトレンチを入れた。盛土・耕作土を重機によって除去し，以後人力によって掘削にはいった。その結果，各トレンチにおいて溝や土壙，掘立柱建物跡の各種の遺構を検出した。北方部のA～Cのトレンチでは，中世頃の小さな自然流路や奈良時代頃の遺物の出土した南北方向の溝，古墳時代の土壙や溝などを検出した。中央部のD～Hトレンチにおいては，奈良時代頃の掘立柱建物跡や井戸跡，溝，土壙，そして長岡京の姉小路（仮称）の道路側溝や中世の大溝などを検出した。南方部のI～Kトレンチでは，I・Hの両トレンチで奈良時代頃の掘立柱建物跡を，Kトレンチでは，古墳時代から奈良時代頃の遺物が出土した大きな自然流路を検出した。そしてこの自然流路から南では，掘立柱建物跡は検出されず，土壙がいくつか検出されたのみであった。

今回の調査で検出した掘立柱建物群は，真南方向にほぼ向くものと，真南北の軸線から振れているものがあり，数回の建て替えが認められる。またこの掘立柱建物群は，前述の様にKトレンチの自然流路から南には存在せず，この流路が集落の南の限りとなっていたのであろう。



調 査 地 位 置 図

ま と め　以上の様に，今回の調査では，長岡京の条坊がこの地まで施行されていたことを確認した他，奈良時代頃この地に集落が営まれていたことを確認した。現在，まだ整理を続けており，詳細については，整理終了後報告したい。

（山口　博）

22. 長岡京跡右京第84次（7 ANITT 地区）

所 在 地　長岡京市今里４丁目～庄ノ淵

調査期間　昭和56年11月11日～12月26日

調査面積　約300㎡

調査概要　都市計画街路改良工事（外環状線）に伴う発掘調査で，昭和52年以来，京都府教育委員会によって調査が継続していたが，今回から，当調査研究センターが担当することになった。これまでの発掘調査によって，地上には痕跡をとどめていなかった古墳(今里車塚古墳)が発見されている。この古墳のくびれ部にあたる部分の掘削が予定されたため，事前に発掘調査を実施することになった。古墳のくびれ部にあたる場所を中心に，南北に長いトレンチをいれた。

調 査 地 位 置 図 (1/25,000)

今回の調査で，上層から発掘されたものに，トレンチの北端及び南端の南北方向の溝と，トレンチ中央の近代溝，中世の井戸がある。溝は，いずれも幅 0.7m 前後の浅いもので，長岡京以後のものである。井戸は径 3.5～４mの素掘りのものである。近代溝は杭と側板で護岸されていた。下層から，墨で文字の書かれた付札の断片が２点出土した。

今里車塚古墳に関連するものでは，南側くびれ部にあたる地点と，これに接続する前方部側で柱痕が，また，北側で後円部の葺石・転落石と柱痕が検出された。柱痕は，古墳の基底部を廻るもので，古墳の規模を推定する基準となっている。南側で検出された柱痕は，推定位置に一致する。北側では，くびれ部と推定されたことから，くびれ部は柱一本分ずれる可能性がある。古墳周濠は，長岡京造営時に埋められたことを再確認した。周濠及び墳丘上で，条坊に関連する遺構は見つからなかった。古墳周濠からは，古墳時代，長岡京時代の遺物が出土しており，周濠の下層からは，笠形木製品２点と朝顔形埴輪のくびれ部より上部に赤色顔料が内外面に塗られたものが出土している。

（石尾 政信）

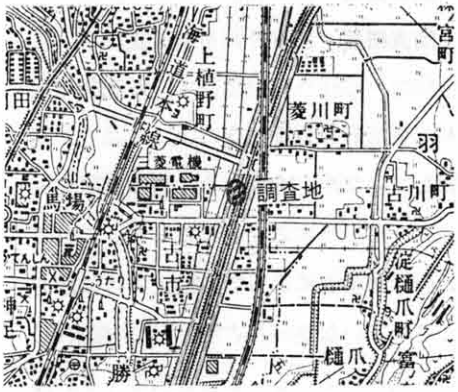
23.　長岡京跡左京第83次（7ANFKI 地区）

所 在 地　向日市上植野字南淀井～長岡京市馬場字北石ケ町，他

調査期間　昭和57年2月8日～2月15日

調査面積　約50㎡

はじめに　今回の調査は国道171号線京都方面行きの歩道工事に起因する。調査対象はこの南北約300mの工事区であるが，とくに長岡京復元図によれば左京四条二坊から五条二坊の広い範囲にあたるため，推定される道路，側溝部分を中心に調査区（1×8m）を6か所設定することにして，その他は立会調査を行った。ところが，この工事区にはすでに埋設管や人孔があるため，予定の調査区は設定できず，土層観察さえ困難であった。



調 査 地 位 置 図（1/50,000）

調査地の周辺の地形は標高10m程の低位湿地である。道路の西側は水田が開け，南北の畦畔は磁北に直線的に走る。しかし，東西の畦畔は弧の変形の曲線を描く。これは旧地形あるいは河川の氾濫によって畦畔が規制を受けていることを示すものであろう。

調査成果　調査対象地の全般的な土層は基本的には現水田の耕作土，床土，淡黄灰色粘質土，青灰色粘土，灰色砂礫の順に堆積する。淡黄灰色粘質土もやはり水田と考えられる。青灰色粘土からは，8世紀の土師器，須恵器，高杯が検出された。灰色砂礫は遺物を含んでいない。長岡京の側溝はこの灰色砂礫を切り込んで検出できるものであるが，今回は発見できなかった。その原因は青灰色粘土の上層に厚く褐色砂礫，砂層が堆積し，部分的にこの粘土を切り込む。この褐色砂礫，砂層はベッディングを呈し，明らかに氾濫層である。このことから，長岡京の遺構は洗い流されている可能性が強く，加えて調査区の狭小さと重なって，検出できなかった。

ま と め　この調査は試掘調査や立会調査に似たものであるが広大な長岡京跡を解明するうえで，たとえ一つの点であっても貴重な調査であると言えよう。今回の調査では長岡京に関する遺構は確認できなかったが，このような調査は開発が益々盛んになっている今日，機会ある毎に積極的に取り組んでいく必要を感じる。　（竹井 治雄）

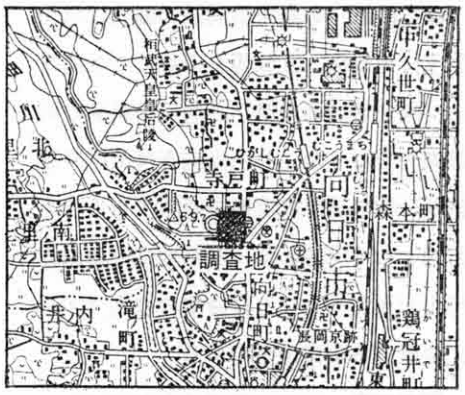
24. 長岡宮跡第119次（7 AN16C 地区）

所 在 地　向日市寺戸字南垣内

調査期間　昭和57年3月4日～5月20日

調査面積　約700㎡

はじめに　本調査地は，長岡京条坊復元図によれば長岡宮の北西端にあたり，宮域の北限を解明することが調査の主目的であった。また，当調査地の東側では，一昨年に向日市が調査を行い，中世の柱穴が多数検出され，溝も確認された。そして，当地は「垣内」，「古城」の字名が残っていることから，中世の城館を想定することができた。



調 査 地 位 置 図 (1/50,000)

調査地の地形は，標高27m～35mの段丘斜面上に竹草が生息する，東から西へ比較的勾配を持つ緩斜地である。しかし，調査地の東半部は，平らな地形を呈し，ここに遺構が存在する可能性が強く，当初から調査区を広げた。

調査結果　今回の調査で検出した遺構は，長岡京期に比定される溝，中世の柱穴群，近世の溝，土壙等がある。これらは，すべて前述の調査区東半部の平らな部分で検出されたものである。一方，緩斜地では竹藪の地境溝が確認できたのみである。

長岡京期に比定される溝は，南北に約35m分検出された。この南北溝は，蛇行しながら，真北方向から大きくずれ，溝幅は1.0～1.6mと南で幅広く，深さ0.3～0.7mを測り，溝底も南へ徐々に低くなる。埋土は上，下層に分けることができるが，茶褐色を呈する粘質土が主体をなし，流れを示す堆積土はなく，廃絶時には比較的短期間に埋没したものと思われる。溝の性格については，人為的か自然的なものか判然としないが，緩斜地にそって流れていること等から排水溝の可能性が強いと考えられる。

ま と め　上述の溝は，長岡京期に比定されながらも条坊に係わるものでなく，他の関連遺構もないことから，長岡宮の造営は，当調査地では行われなかったことを示す資料である。このような結果は，宮域の北限をさらに北へ広げて推定できる資料として貴重である。

（竹井 治雄）

25. 亀岡条里制跡

所 在 地　亀岡市大井町南金岐

調査期間　昭和56年9月17日～11月7日

調査面積　約2,700㎡

はじめに　亀岡条里制跡の調査は昭和54年に地籍図，文献等を中心にした調査と，現在地表面に整然と残る条里制の測量調査を行った。今回の調査は条里制遺構及び他の遺跡の有無を確認することを目的として実施した。調査地は行者山の尾根が東側へ延びた丘陵端の標高 100mに位置する水田地帯である。

調 査 地 位 置 図

調査概要　調査は道路予定方向に沿って3m幅のトレンチを2本設定し，掘削を行った。その結果，表土下約1mで中近世の溝状遺構，弥生時代の溝状遺構，方形周溝墓，弥生時代から中世に及ぶ遺物包含層を確認した。検出遺構は南北に長い調査地の北西部に集中しており，中でも中近世の溝は幅0.2m深さ0.1mの小溝が8条近く集中し南北方向に走っている。調査地の1町南側で条里地割があると考えられる現在の畦畔から1m西側へ平行にずれた状態で南北方向に走る溝を検出しているが，条里制に伴う溝としては小さく，場所によっては4条から8条に変化することから今後の検討を要する。

弥生時代の溝としてはコンテナ箱250箱分の遺物が出土した溝がある。この溝は南北方向の幅約0.9m深さ約1mと東西方向の幅1m深さ1mが十字状に交差する溝で，溝内からは石斧，石剣，石包丁なども出土している。この溝以外はすべて小流（幅約0.5m深さ0.1m）である。方形周溝墓は南北約6.4m東西約5.5mの規模をもち南北方向に3基並んでおり北側に位置する1号墓の東辺溝底からは畿内第3様式の完形に近い高杯が出土した。

ま と め　現地表で整然と残っている条里地割は遺構として確実なものは検出できなかったが，条里制以前の弥生時代中期から後期にかけての溝状遺構・方形周溝墓を検出したことより，この地域周辺に広範囲な弥生時代の集落が推定される。また，多量の弥生式土器が出土したことから，当地方の空白の多い時期を埋める貴重な資料を提供した。

（村尾 政人）

26. 青 野 遺 跡

所 在 地 綾部市西吉美前2-3

調査期間 昭和57年3月4日～3月31日

調査面積 200㎡

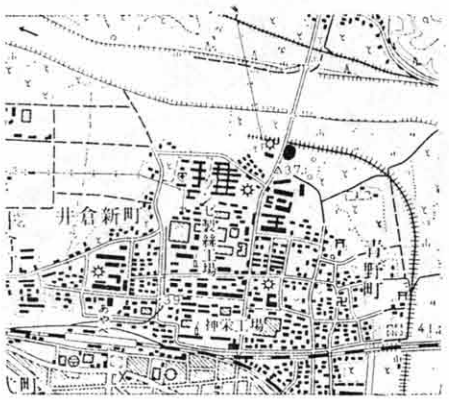
はじめに 京都府土木建築部道路建設課は，由良川白瀬橋の老朽化に伴い橋梁新設改良工事を計画した。当該地は，由良川左岸に沿った自然堤防上に広がる青野遺跡の一画に当るため，事前に調査を行い，記録作成するとともに，重要な遺構が確認された場合には，その保存を計るための資料も合わせて作成することを目的として調査を実施した。

調査概要 調査地は，昭和47年度に綾部市教育委員会が調査を行った青野遺跡A地点の道路1本へだてた東側に位置している。

調査は，対象地全域に6か所のトレンチを設定し掘削を開始した。その結果，表土下40～50cmにおいて黄褐色粘質土の地山面を確認した。しかし，調査地北側部分と南側部分の数か所は，以前，グンゼ株式会社の社宅が建っており，遺構面がほとんどそれによって削平を受けていた。

検出遺構 限られた調査面積，後世の削平にもかかわらず，調査地中央部においては，4か所の切合う住居跡，2か所の単独住居跡の計6基の住居跡を確認した。住居跡はすべて方形である。用地の関係上全体の規模のわかるものは，一辺3.2×2.8mで，最大のものは，一辺5.0×4.8mと推測される。その他に土壙3か所，溝1条，ピット31か所を確認した。

出土遺物 出土した遺物は弥生時代～古墳時代全期にわたるが，前記した遺構埋土中からは，弥生式土器・土師器・須恵器・磨製石斧等が出土している。その他に，青野遺跡A地点でも出土した祭祀的要素の強い磨製石剣の破片も1点出土している。



調 査 地 位 置 図 (1/25,000)

ま と め 今回の調査によって，青野遺跡A地点発掘調査地東側部分では住居跡は確認されていなかったが，当調査地で古墳時代前期の住居跡7基を確認したことや，弥生時代～古墳時代全期にかけての遺物が出土したことにより当調査地東側部分にもかなりの住居跡が存在するものと考えられる。

(増田 孝彦)

27. 後 青 寺 跡

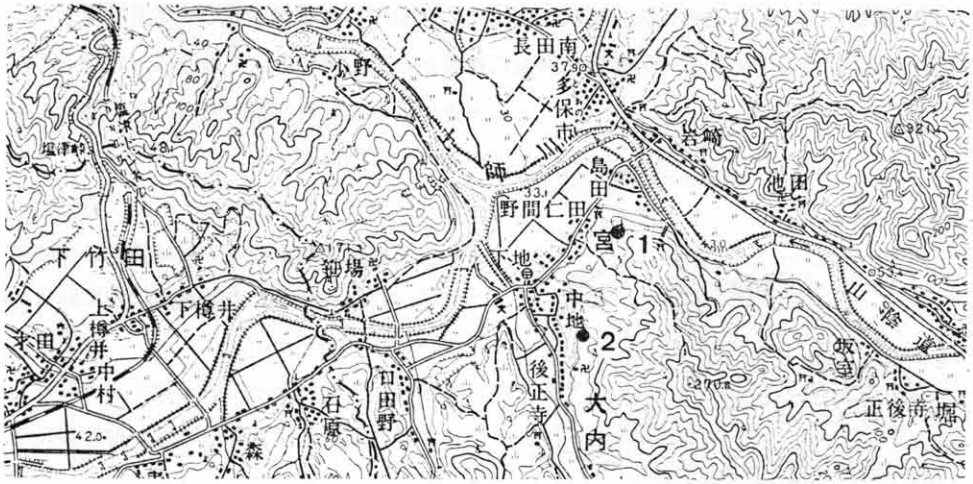
所 在 地　福知山市大字大内字後青寺，小屋ケ谷

調査期間　昭和56年8月18日～9月18日

調査面積　430㎡

はじめに　本遺跡は，福知山市東南部の兵庫県境にほど近い，竹田川右岸の丘陵上に位置する。当地域は，大内川と呼ばれる小河川が狭隘な谷平野を形成しており，遺跡はそれに向って派生する丘陵の端部に占地する。(注1) 現地には外郭を，土塁・空堀によって囲まれた一辺約30m前後のほぼ台形状の平坦地が遺存し，当地および周辺に「後青寺(ごしょうじ)」・「後正寺」の小字名が残ることから，これまで『丹波志』(注2) に記載される同名寺院の故地に比定されてきた。今回，近畿自動車道舞鶴線が当該地に予定されたため事前に発掘調査を実施した。

調査概要　まず計画道路敷のセンター杭を基準に3m方画の地区割を行い，中央にアゼを残しながら掘り下げた。その結果，前述の平坦部では表土下すぐに地山に達した。また調査地の北側地区では，いくつかの小ピットを検出したが，掘立柱建物の柱穴跡というよりも樹木等の抜根跡と判断される状況であった。土塁については2か所で断ち割り調査を行った。その結果，南辺土塁部に入れたトレンチから空堀状遺構を検出した。これは，現在西辺土塁の外郭をめぐる空堀に接続するものであった。出土遺物は，美濃系天目茶椀・瓦質すり鉢等の近世陶磁器片の他，景徳元宝（1枚）・弥生土器片がある。しかし調査

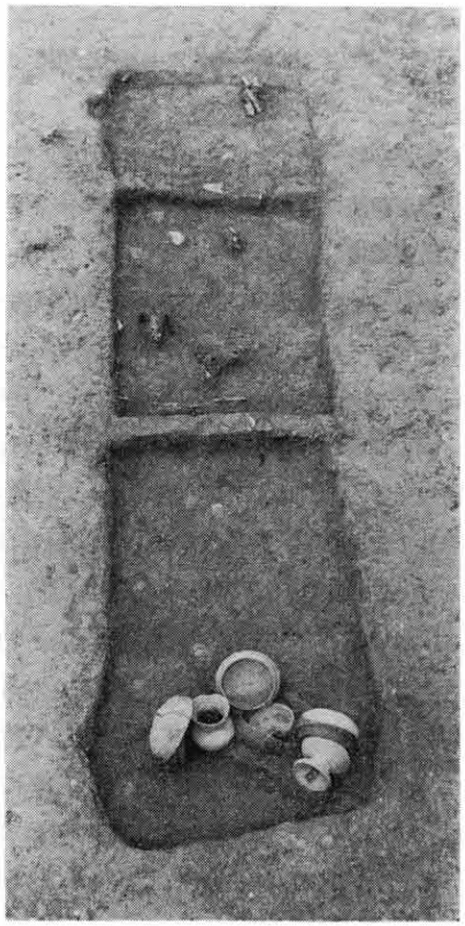


調　査　地　位　置　図　(1/50,000)

1. 宮遺跡　2. 後青寺跡

面積に比して量は極めて少ない。なお，土墨断ち割りの際，古墳時代の須恵器杯身（2点）が出土した。

後青寺古墳　上記調査地背後の丘陵尾根にトレンチを入れたところ，木棺を直葬する古墳主体部を2基検出した。削平が著しく底部に近い部分が遺存するのみである。第1主体部(西棺）は，長さ2.5m，幅0.55mで尾根に直交。第2主体部（東棺）は長さ1.73m，幅0.52mを測り，軸線を尾根に平行させる。両方とも，棺の片方の端部に須恵器・土師器の一群を置く。また，第1主体部から鏃(平根＋尖根式)・鎌・斧・刀子等の小型鉄製品が出土した。埴輪・葺石等の外部施設は認められない。なお，主体部位置から西9.5mの所で浅い掘り割り状の遺構を検出したが，当古墳に伴うものかどうかは明らかでない。



第　1　主　体　部（南東から）

ま と め

1.　今回調査地内からは建物跡等の遺構は検出されなかった。しかし，出土遺物から当遺構が中世末～近世初頭頃に活動の時期をおくことが判明した。外形構造からみて防禦的な性格が強く，室町・戦国期の城館跡に係るものと考えられる。すなわち，当初予想した後青寺跡については別の場所に求められよう。同様な方形城館跡については当地周辺でも数か所知られており，今後これらのあり方について調査検討してゆく必要がある。

2.　古墳の検出は今回予想外の成果である。前記城館等の築造によって外形は著しく削平されていた。そのため墳形・規模等不明瞭である。推定では約一辺13m前後の方墳の可能性が考えられる。副葬された須恵器類は6世紀初頭頃に比定されるものであり，大内地域で現在のところ知られている古墳のなかでは，最も古い時期に属す。また，今回検出した古墳以外にも同種の古墳が存在したことが推測される。　（辻本 和美）

（以下40ページに続く）

28. 宮　遺　跡

所 在 地　福知山市大字宮字城ノ尾，他

調査期間　昭和56年10月6日～12月25日

調査面積　550㎡

はじめに　近畿自動車道舞鶴線建設に伴う宮遺跡の発掘調査は，昭和54年度から継続して行われている。これまでの調査の概略については，本誌創刊号でふれておいた。ここでは昨年度（56年度）の調査概要について簡単に紹介しておく。

調査概要　今回調査の対象とした地点は，遺跡推定範囲のうちの南東地域に当り，標高70m前後とこれまでの調査地のなかでは最も高所を占める。丘陵の傾斜も比較的急であり，当初予定した弥生時代集落に関する遺構は検出できなかったが，低平な封土をもつ中世墳墓3基と礎石建物跡1棟が確認された。

中世墳墓　樹木伐採後の地表観察により見つかったもので，北側に位置するものから順に1～3号墓と呼ぶ。1号墓は直径約6m，高さ約70cm。不整円形で斜面の上手に丘陵と区画する空堀状凹地をめぐらす。頂部に拳大の河原石が集石し，その直下から埋葬主体の土壙を2基検出した。土壙は北西一南東に長軸を置き，約80cm離れて並列する。北側土壙は長さ1.9m，幅0.6m。平面隅丸方形で深さ約60cmを測る。南側土壙は長さ1.5m，幅0.8m。やや楕円状を呈する。両土壙は盛土の中途で掘られている。また両方とも北面す

中　世　墳　墓（左から1，2，3号墓）

る端部が幅広く，ここに上部３方を割石で囲まれる深さ60cm程の壙（副室？）を付設する。経塚例との類似からこの空間に陀羅尼等の経文を埋納したと考えておきたい。北側土壙からは，土師皿６枚が出土した。また当墓の裾部で割石を円形又は六角形に配した小型石組遺構を検出した。内部に骨片を含み火葬墓と思われる。

２号墓は直径５ｍを測るが変形が著しい。外表面に川原石が葺かれており，なかに列状，方形状に石を配した箇所もある。中央部北寄りに蔵骨器として使用されたと思われる丹波系大甕が据えられていた。胴の上半分を打ち欠きその下部を転用したもので，内部には多量の骨片とそれを被う大きな石塊が納められていた。葺石範囲内には他にも骨片の散乱する箇所が認められる。当墓は火葬墓の形態をとるものである。

３号墓は，径５ｍ程の規模をもつ。中央直下に長さ2.5m，幅0.9mの埋葬土壙をもつ。主軸は南北に置く。壙内には10数個の石塊が転落した状況でみられ，北端の石塊の下部から鉄刀子１振り，土師大皿２枚，小皿７枚が出土した。皿類は並べられ，なかには上下２枚を重ねるものもある。鉄刀子は長さ31cm。壙軸に直行する形で置かれている。守刀として死者の魔除けの為に副葬されたものである。１号墓の土壙と同様，壙内から釘類は出土していないので，埋葬に当っては組合式木棺を用いたものと思われる。

礎石建物跡　上記墳墓群の下方の平坦面で検出した。この平坦面は丘陵斜面を削り，低い方に置土して成形する。建物の礎石は１か所が原位置に残る他は全て消失し，下部根石が部分的に遺存するのみである。規模は東西４間（8.4m），南北３間（6.3m）で東西両面は廂になる。柱間は2.1m（７尺）の等間隔。周辺からも瓦類は出土していないので，瓦葺ではなかったらしい。

ま と め　調査した中世墳墓は大略，鎌倉時代から南北朝期にかけて３→１→２号墓の順に造作されたものである。被葬者像については，富裕な名主層や地方豪族たる武家層が想定される。おそらく累代の墓地として利用されたのであろう。建物跡については，建立の時期を知る資料に乏しい。しかし，周辺から出土したわずかな土師器片によって墳墓群と同時期と考えられる。建物の性格についても，一般の住居というより墓を供養し，祖霊を弔った庵又は墓堂と考えておきたい。

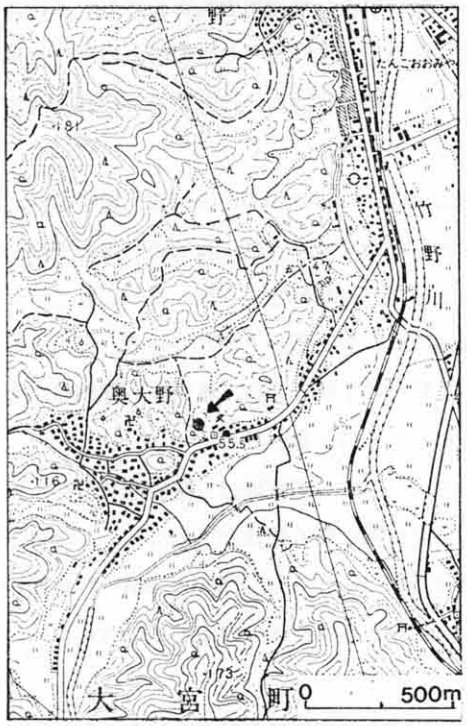
中世の墓制に関しては「餓鬼草紙」などの絵巻物によって当時の墓地の様相をうかがうことができる。しかし，考古学のうえからの体系的な調査研究は，あまり進んでいないのが現状である。いうまでもなく墳墓は各時代の社会・政治の構造を知るうえに重要な資料であり，今回の調査例も当地域の中世史研究に貴重な資料を提供するものと思われる。

文末ながら，今回も調査全般にわたって御協力を得た地元宮地区の方々に心より御礼申し上げる。

（辻本　和美）

府下遺跡紹介

6. 新　戸　1　号　墳 <図版7>



第1図　新戸古墳群位置図

新戸古墳群は京都府中郡大宮町字奥大野，国鉄丹後大宮駅の西南約1.5km に位置する。奥大野の集落には崖を利用して，一見横穴を思わせる様な穴が多数見られるが，これは通称「芋穴」と呼ばれ，芋等を保存するための施設だと言う。

大宮町には，古くから祭祀遺跡として著名な大宮売神社遺跡があり，出土遺物の一部は現在，社務所に保管されており，社務所に申し出れば見せてくれる。又，新戸古墳群周辺には，光明寺裏山古墳群，黒田古墳群，裏陰遺跡等がある。これら古墳群と裏陰遺跡は，墓域と住居域との関係にあり，非常に興味深い位置関係である。

本古墳の墳丘は，従来，円墳とされてきたが，全長35m，後円部直径20m，後円部高さ5m，前方部幅28m，前方部高さ4mの前方後円墳である事が現在確認されている。尚，2号墳は，直径20m，高さ2mの円墳である。

石室は，両袖式の横穴式石室で，玄室長さ5.9m，幅2.1m，高さ3.3m，羨道は崖のために大半が崩壊しており閉塞状態，及び全長は知り得ないが，現存長は1.2m，幅1.1mを辛うじて測る事ができる。現存する石室全長は7.1mである。

出土遺物は，雲珠1，鏡板1，水晶切子玉1，碧玉管玉2，瑪瑙勾玉3，金環10である。特に鏡板は被葬者の社会的地位を推測するには絶好の資料であると言える。

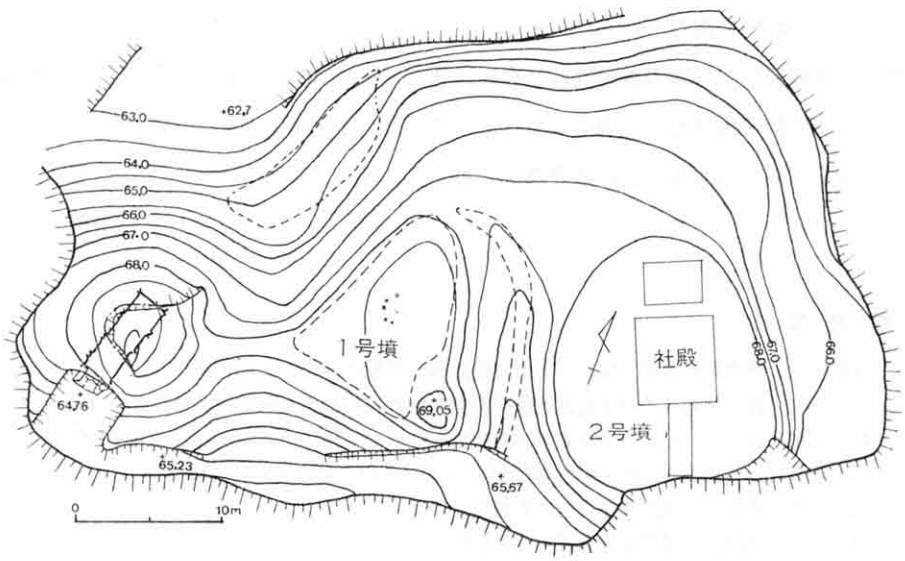
本古墳で特記すべき事は，玄室，奥壁に所謂「石棚」を有している事である。この石棚は奥壁と両側壁に組み込まれており，奥行1.4m，幅2m，厚さは奥壁部で0.7mを数え，尖頭状になっている。奥壁は石棚の上下に各々一石ずつ配して構成されているが，側壁は

2～3石ずつで構成されている。一方，石棚上端から天井石までの高さは1.7mあり，流入土のため床面は知り得ないが，床面から石棚下端までの高さは，それ以上になる。

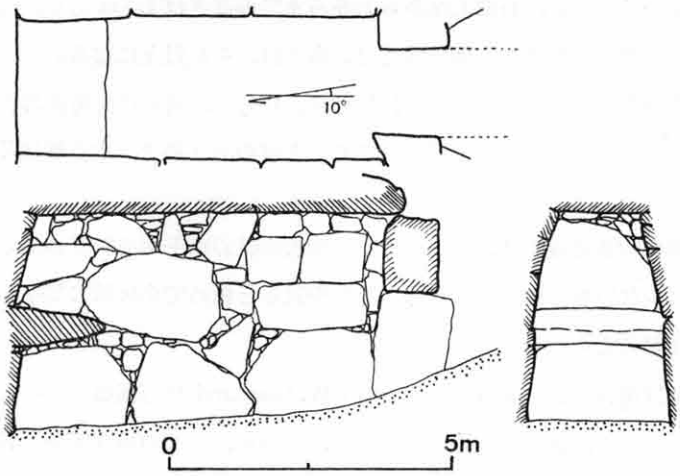
京都府下に於いて石棚を有する古墳は，亀岡市千代川町拝田16号墳，同薛田野町鹿谷古墳，同大井町土田小金岐76号墳とその西南丘陵稜線上にある古墳の計5基で，本古墳は最も典型的であろう。

石棚を有する古墳は全国に60基足らずで，近畿地方では和歌山県岩橋千塚で34基確認されており，北九州でも数は少ないが一般に見られる。分布を見ると極めて小地域に集中しており，地域集団との関連が考えられる。

さて，本古墳から若干話は逸れるが，鹿谷古墳(全壊)でW. Gowland は石棚の上に甲冑を発見し，埋葬時に石棚の上にも副葬品を安置したと考え，その後，一部の研究者から葬送儀礼と何らかの関連があると言う見解も出された。しかし，斎藤忠氏は「(略)遺骸は石室内に，直接安置されたり，木棺または石棺に入れられて室内に置かれたが，この場合，主として佩装具関係のものが遺骸に副えて収められた。しかし，甲冑，馬具，容器等各種の品々は，これらの棺外または遺骸からはなれて，石室内に所狭く配置された。したがって，追葬の場合はこれらの一部を移動することも行われ，石棚のある場合には，この上にも載せられ，または側壁に立てかけたまま置かれたこともあった（略)」と論述され，一方，森浩一氏も「石室を強固にするための構造上の必要から発達したと考えられ，副葬品を置くなどは，付随的に生じた用途であろう」と論述され，追葬に依って起った現象である事を述べておられるが，その他の用途を主張する根拠は薄いため，現在では一般に石



第2図 新戸古墳群地形測量図



第3図　新　戸　1　号　墳　石　室　実　測　図

室上部の安定を良くし，延いては，石室の崩壊を防ぐための技術であると言う説が踏襲されている。

石棚を有する古墳は九州地方にも一般的に見られることは既に述べたが，熊本県大野窟古墳（6世紀後半の須恵器出土）にも石棚があり，直接の関係はないが，本古墳の石棚設置技術も九州のそれと深い関係がある事は誰しも認めるであろう。大野窟古墳は韓国で良く見られる穹窿状天井古墳で，石棚の下側に巨石を据え，上部は小塊石で積み上げ，概して持送りの度合が大きくなる場合に使われた構造的技術要素が強いと考えられるが，本古墳の場合は石室の構造から見て，それと同様と考えるのは困難であり，別角度からの検討が必要である。

以上，若干の考察を加え，新戸1号墳を紹介してきたが，6世紀（古墳時代後期）に，この様な石棚を有する古墳が大宮町下に於いて築造された社会的背景が如何なるものであったのか等，今後の検討を要する事項は数多くある。その意味で本古墳は今後一層重要視されるに違いないであろう。

最近，埋蔵文化財保護の重要性は社会に浸透して来てはいるが，京都府下に於ける本古墳の学術的価値を再評価し，適切な処置を取り，永久に保存したいものである。

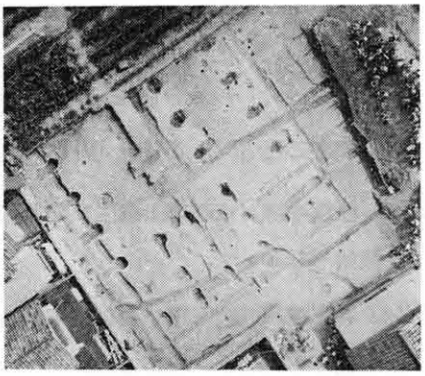
尚，現地では，教育委員会，教育次長の貫名英功氏に御世話になり，心から御礼申し上げる。

（小池　寛）

参　考　文　献

梅原末治「奥大野村古墳石室」『京都府史蹟勝地調査会報告』第1冊1919
堤圭三郎「国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1976
堤圭三郎「国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1977
平良泰久ほか「周山瓦窯跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』1979
大宮町教育委員会『裏陰遺跡発掘調査概報』1979
財団法人京都府文化財保護基金『古墳・埋蔵文化財』　1972
斎藤　忠『日本古墳の研究』吉川弘文館　1961

長岡京跡調査だより



内裏正殿跡

桓武天皇によって延暦3（784）年から延暦13（794）年まで営まれた長岡京跡も，近年発掘調査の進展に伴い，さまざまなことが判明してきた。しかし，京域が三市一町（京都市・向日市・長岡京市・大山崎町）にわたるため，調査主体がさまざまに分かれ，資料が個別に蓄積される結果となっている。そのため，長岡京域の調査を担当する各調査機関が集まり定期的に調査の情報交換や資料の収集・検討の場として，長岡京跡連絡協議会（仮称）が発足した。また，今まで長岡京跡発掘調査研究所が行っていた，調査の次数付け，調査カードの収集は，今年度から当調査研究センターが担当することとなった。

今年度は，4月27日に第1回目の連絡協議会を，当調査研究センター長岡京跡整理事務所で開き，調査カードの体裁や今後の連絡協議会の運営等について話し合った。その中で，大路・小路の呼称方法や連絡協議会を毎月第4水曜日に当調査研究センター長岡京跡整理事務所に1府3市1町と当調査研究センターの職員が集合して開催するということなどが確認された。第2回は，5月26日に開かれ，中山修一先生から『長岡京について』の講演をいただいたあと，当調査研究センター・長岡京市教育委員会・向日市教育委員会・大山崎町教育委員会の最近行った現場をスライドなどを交えて報告がなされた。当調査研究センターが宮内第119次調査，長岡京市教育委員会が右京第90次調査，向日市教育委員会が左京第82次調査，大山崎町教育委員会が公民館増設工事に伴う確認調査の報告を行った。宮内第119次調査では，北西から南東方向に延びる長岡京期頃の溝などを検出した。右京第90次調査は，長岡京の西二坊大路の両側溝と古墳時代の方形周溝墓などが検出された。左京第82次調査は，長岡京の左京二条三坊一町の地割り溝や銅鐸の鋳型などが出土した弥生時代の大溝を検出した。大山崎町の調査は，現在も続行中で，平安時代前期の掘立柱建物跡を検出中である。また，財団法人京都市埋蔵文化財研究所では，現在南区久我で日本住宅都市整備公団の団地造成に伴う試掘調査を実施中で，現在のところは，13世紀以降の遺物を出土する沼沢地を検出している。この後，次回以降の連絡協議会について意見交換があり，今後どのように対処していくかなどの話が行われた。そして，次回は6月23日として，この日の連絡協議会を終えた。

（山口　博）

センターの動向

1. できごと（57. 3月～5月）

3. 2　法成寺跡（京都市上京区）発掘調査開始～4.30

3. 4　青野遺跡（綾部市）発掘調査開始～4.22

3. 6　豊富谷丘陵遺跡群（福知山市）発掘調査終了56.5.6～

3.12　広隆寺跡（京都市右京区）第2次発掘調査終了1.11～

3.12　長岡京跡右京第83次（長岡京市，都市計画道路石見，淀線内）現地説明会実施，約70名参加

3.23　昭和57年度職員採用試験実施

3.25　昭和57年度職員採用試験合格者発表

3.25　宮ノ平遺跡（城陽市）関係者説明会実施

3.27　条里制跡（亀岡市）発掘調査終了1.30～

宮ノ平遺跡（城陽市）発掘調査終了1.25～

3.27　第3回役員会及び理事会開催
—於パレスサイドホテル—
福山敏男理事長，岸　俊男，川上　貢，足利健亮，中沢圭二，佐原　真，原口正三，井上裕夫，城戸秀夫，東条　寿各理事，栗栖幸雄常務理事，前尾有人監事出席

3.29　長岡京跡第83次（長岡京市，都市計画道路石見，淀線内）発掘調査終了56.10.26～

4. 5～20　新規採用職員研修実施

4.20　長岡京跡整理事務所開所

4.28　狐谷横穴群（八幡市）現地説明会実施，約70名参加

5.2～3　日本考古学協会総会出席（松井主任調査員，伊野調査員）

5. 4　篠窯跡群（亀岡市）発掘調査開始
亀岡条里制跡（亀岡市）発掘調査開始

5.10～22　奈良国立文化財研究所主催昭和57年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修「集落遺跡課程」参加（山口調査員）

5.12　大内城跡（福知山市）発掘調査開始

5.14　狐谷横穴群（八幡市）発掘調査再開

2. 普及啓発事業（57. 3月～5月）

3.13～14　第5回研修会—於福知山市民会館—開催（発表者及び題名）水谷寿克「丹波浄法寺跡の発掘調査」，樋口隆久「丹波笑路城跡の発掘調査」，中村孝行「上林城跡の発掘調査」，浪江庸二「金屋比丘尼城跡の発掘調査」，伊野近富「大内城跡の発掘調査」，藤井善布「福知山地方の中世城郭について」（講演者及び題名）百田昌夫「丹波・丹後の荘園と守護・守護代」村田修三「中世城跡の発達について」参加者延約250名

3.31　『京都府埋蔵文化財情報』第3号刊行

4.24　第6回研修会―於教育文化センター―開催（発表者及び題名）大槻真純「城陽市宮ノ平遺跡の発掘調査」，水谷寿克「伊根町中尾古墳の発掘調査」，松井忠春・戸原和人「加茂町前椚2号墳の発掘調査」，長谷川達・久保田健士「八幡市美濃山狐谷横穴群の発掘調査」参加者68名

5.26　オランダ・グローニンゲン大学生物学考古学研究所長 H. T. Waterbolk 教授講演会(「オランダにおける集落の発掘」)―於京大会館―開催（京都大学文学部考古学研究室，財団法人京都市埋蔵文化財研究所と共催）参加者約50名

3.　人事異動

3. 1　小泉信吾調査員退職（社団法人関西将棋博物館学芸員として就職のため）

3.15　久保哲正調査員退職（京都府教育庁指導部文化財保護課技師として就職のため）

3.31　大槻真純調査員退職（福知山市教育委員会事務局社会教育課主事として就職のため）

4. 1　岡崎研一，黒坪一樹，小池寛，岩松保，田代弘，山下正（以上調査課調査員）長関和雄（調査課嘱託）採用さる。

4. 1　松井忠春，長谷川達，水谷寿克，辻本和美調査員，主任調査員に昇任。

安田正人主事，会計主任に昇任。

4. 2　土橋誠，藤原俊晃（以上調査課調査員）京都府教育委員会から派遣さる。

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター
組織および職員一覧 (57.6.30現在)

理事長

福山敏男（京都府文化財保護審議会委員 元京都大学教授）

副理事長

樋口隆康（京都府文化財保護審議会委員 京都大学文学部教授）

理　事

栗栖幸雄（常務理事，事務局長）
岸　俊男（京都大学文学部教授）
藤井　学（京都府立大学文学部教授）
川上　貢（京都府文化財保護審議会委員 京都大学工学部教授）
足利健亮（京都大学教養部助教授）
中沢圭二（京都府文化財保護審議会委員 京都大学理学部教授）
佐原　真（奈良国立文化財研究所 埋蔵文化財センター研究指導部長）
原口正三（大阪府立島上高等学校教諭）
藤田价浩（財団法人京都古文化保存協会 理事長）
井上裕雄（京都府文化芸術室長）
城戸秀夫（京都府教育庁指導部長）
東条　寿（京都府教育庁指導部 文化財保護課長）

監　事

前尾有人（京都府出納局長）
中村義明（京都府監査委員事務局長）

事務局長　栗栖幸雄

総務課　課長　白塚　弘
会計主任　安田正人
主事　塔下麗子　古澤俊彦
嘱託　中西　修

調査課　課長　堤　圭三郎

企画資料担当　主任調査員　松井忠春
調査員　田中　彰　増田孝彦
〃　小池　寛
嘱託　長関和男

第1担当　主任調査員　辻本和美
調査員　伊野近富　竹原一彦
〃　小山雅人　戸原和人
〃　岩松　保　藤原敏晃

第2担当　主任調査員　水谷寿克
調査員　石井清司　村尾政人
〃　引原茂治　岡崎研一
〃　土橋　誠　田代　弘

第3担当　主任調査員　長谷川　達
調査員　山口　博　石尾政信
〃　竹井治雄　久保田健士
〃　山下　正　黒坪一樹

受　贈　図　書　一　覧（2～5月）

(財)古代學協會	古代文化 第277号～第281号
東大阪市遺跡保護調査会	東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集 1980年度
(財)岩手県埋蔵文化財センター	川向Ⅲ遺跡発掘調査報告書，御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書，考古遺物資料集 第2集
魚津市歴史民俗資料館	天神山遺跡調査報告書，魚津市石垣遺跡発掘調査報告書，佐伯遺跡，印田近世墓
奈良教育大学古文化財教育研究室	古文化財教育研究報告 第1号～第10号
鹿児島県教育委員会	新番所後遺跡，指辺・横峯・中之峯・上焼田遺跡，大隅地区埋蔵文化財分布調査概報，西之薗遺跡， 九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ～Ⅷ
愛知県清州貝殻山貝塚資料館	土田遺跡
広島県教育委員会	広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告
(財)千葉県文化財センター	千葉市大膳野北遺跡，千葉県文化財センター年報 №3～№5
同志社大学校地学術調査委員会	相国寺霊宝殿地点の発掘調査―現地説明会資料―
石川県立埋蔵文化財センター	石川県遺跡地図
加悦町教育委員会	芦ノヤ・河ノ辺遺跡発掘調査概要
田辺町教育委員会	田辺町埋蔵文化財調査報告書 第2集
(財)大阪文化財センター	大阪文化誌 第14号
(財)鳥取県教育文化財団	長瀬高浜遺跡発掘調査報告書 Ⅲ
奈良国立文化財研究所	奈良国立文化財研究所年報 1981
小松市立博物館	小松市立博物館研究紀要 第19集
八尾市教育委員会	八尾南遺跡
加古川市教育委員会	札馬古窯跡群発掘調査概要

東京大学文学部常呂研究室	岐阜第二遺跡
磐田市立郷土館	磐田市京見塚遺跡群発掘調査概要，野際遺跡発掘調査概報
長岡京跡発掘調査研究所	長岡京跡発掘調査研究所調査報告書 第1集， 長岡京市文化財調査報告書 第5冊， 大山崎町埋蔵文化財調査報告書， 向日市埋蔵文化財調査報告書 第3・5・6・7集，長岡京 創刊号～第23号，長岡京跡発掘の二十余年
法政大学文学部考古学研究室	本屋敷古墳群発掘調査概報1
京都府立丹後郷土資料館	由良金毘羅さんの船絵馬
(財)東京都埋蔵文化財センター	研究論集Ⅰ
(財)いわき市教育文化事業団	薄磯貝塚
埼玉県県史編さん室	埼玉県古代寺院跡調査報告書
久美浜町教育委員会	柿本遺跡（付 権現山遺跡），湯船坂2号墳―発掘調査の記録―
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館	飛鳥の王陵
鹿児島県住宅供給公社	小田遺跡（隼人塚団地B地点）
北見市立北見郷土博物館	北見市開成6遺跡発掘調査報告書
精華町企画管理室	精華町基本構想緑と田園環境に包まれた住宅都市をめざして，せいか
小平市遺跡調査会	鈴木遺跡
(財)茨城県教育財団	木葉下遺跡
早稲田大学考古学会	古代 第71号，第72号
大谷女子大学資料館	幽蘭堂年譜（三），龍泉寺 Ⅱ
名古屋市見晴台考古資料館	館蔵品図録 Ⅲ，瑞穂遺跡発掘調査概要報告書
神戸市教育委員会	史跡五色塚古墳復元・整備事業概要
京北町教育委員会	周山瓦窯跡発掘調査報告書
小見川町教育委員会	東小学校遺跡発掘調査報告書

福知山市教育委員会	福知山市の指定文化財
大田区立郷土博物館	縄文人の食生活
山梨県考古学史資料室	甲斐考古 19の1
堺市教育委員会	堺市文化財調査報告 第10集
広島市教育委員会	親と子の郷土史探訪，国重城発掘調査報告，山城， 高陽台遺跡群発掘調査報告
富山県埋蔵文化財センター	北陸自動車道遺跡調査報告（立山町土器・石器編），同（魚津市編） 小杉流通業務団地内遺跡群，上野赤坂A遺跡， 昭和56年度富山県埋蔵文化財調査一覧
綾部市教育委員会	綾部市文化財調査報告書 第9集
真鍋昌宏	大州遺跡発掘調査概報
北野俊明	堺市文化財調査報告 第8集，第9集
奥田裕之	京都府相楽郡精華町南稲八妻丸山古墳について
江谷寛	畿内隼人の遺跡と伝承
萩本勝	岡村遺跡確認調査概報，岡田八幡宮周辺遺跡群調査概報
岡本正太郎	古代を考える 第5号～第7号，歴史研究 第175号，第178号，第195号，第204号，第229号，第235号
渡辺重義	北佐久郡軽井沢町県遺跡の調査
村岡正	滋賀県の庭園 第一集

京都府埋蔵文化財情報　第3号　　正　誤　表

ページ	行	誤	正
表紙	12	11. 長岡京跡右京第85次	11. 長岡京跡右京第87次
50	タイトル	同　上	同　上
62	28	6　例	12　例
64	1	4　個	6　個

――編 集 後 記――

本誌第４号は，昭和57年度最初の一冊です。そこで，まず今年度の調査予定と昨年度調査のまとめを掲載しました。次の「狐谷横穴群」は古墳時代終末期の埋葬形態を，「豊富谷丘陵遺跡」は古墳築造の初期の段階の様相を知る上できわめて重要な遺跡です。また，佐藤晃一氏に執筆していただいた「加悦町温江百合３号墳出土の埴輪棺」は，まとまった形での報告は今回が初めてのものです。

なお，本号より新たに「長岡京跡調査だより」のページを設けました。今回はありませんでしたが，「教育委員会だより」とともに，京都府の埋蔵文化財の情報交換の場として利用していただければ幸いです。

（編集担当　田中　彰）

京都府埋蔵文化財情報 第4号

昭和57年6月30日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル中御霊町424番地
℡ (075)256-0416

印刷　中西印刷株式会社
代表者　中西　亨
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
℡ (075)441-3155 (代)